

# 聖徒の道

2  
1993



末日聖徒  
イエス・キリスト  
教会

# 聖徒の道

1993年2月号



表紙——以前メソジスト派の牧師を務めていたフィジー人のカラバティ・トゥブ兄弟が最初に教会を知ったのは、1975年だった。バスの中である女性から紹介されたのである。彼は忍耐強く福音の勉強を続け、1984年に妻ルイザの同意を得て、バプテスマを受けた。現在この島国の中で、彼と妻と子供たち全員が活発に教会に通っている。トゥブ兄弟はスルーを着用し、トゥブ姉妹はタバ布で作られたフィジー独特の織物の衣服をまとっている。トゥブ夫妻の自宅の庭で、シャーリーン・ミーク・サンダースが撮影。(本誌「フィジー——信仰の島々」p. 32参照)

こどものページ表紙——ブラマール・ラシカちゃんは、フィジーの末日聖徒のひとり。写真撮影シャーリーン・ミーク・サンダース。

## 一般

- 大管長会メッセージ——イエスが歩まれた道  
第二副管長トーマス・S・モンソン ..... 2
- ブリガム・ヤングと社会的責任 アーサー・R・バセット ..... 10
- 家族のアルバム ..... 18
- フィジー——信仰の島々 シャーリーン・ミーク・サンダース ..... 32
- 備えられた霊の人、ポーンチャイ・ジュントラティップ  
デビッド・ミッチェル ..... 42
- あなたの伴侶の幸福 メルビン・L・ブルーイット ..... 46

## 青少年

- 絵本からの証 マーリ・ソーバンソング ..... 8
- 打ち明けられない悩み リーサ・A・ジョンソン ..... 26
- 聖なる地にて グレゴリー・エンシナ・ビリコフ ..... 30

## 定期特別記事

- 読者からの便り ..... 1
- 家庭訪問メッセージ——日々、主を求める ..... 25

## こども

- モルモン経物語——アモナイハででん道するアルマ ..... 2
- おもちゃばこ ..... 5
- 分かち合いの時間——神でんは主の家 ジュディ・エドワーズ ..... 6
- 安全でたしかな道  
ビッキー・アンダーソン、ローラリー・ウィルキー ..... 8
- 小さなお友だちへ——L・ライオネル・ケンドリック長老 ..... 12

# 聖徒の道

1993年2月号

本誌は、末日聖徒イエス・キリスト教会の公式刊行物です。本誌は以下の言語で出版されています。月刊——イタリア語、英語、オランダ語、サモア語、スウェーデン語、スペイン語、中国語、韓国語、デンマーク語、ドイツ語、トンガ語、日本語、フィンランド語、フランス語、ポルトガル語、ノルウェー語。隔月刊——インドネシア語、タイ語、タヒチ語。季刊——アイスランド語。

大管長会：エズラ・タフト・ベンソン、ゴードン・B・ヒンクレイ、トーマス・S・モンソン  
十二使徒定員会：ハワード・W・ハンター、ボイド・K・バックナー、マービン・J・アシュトン、L・トム・ペリー、デビッド・B・ヘイト、ジェームズ・E・ファウスト、ニール・A・マックスウェル、ラッセル・M・ネルソン、ダリン・H・オークス、M・ラッセル・バラード、ジョセフ・B・ワースリン、リチャード・G・スコット

顧問：レックス・D・ピネガー、ジョン・H・グローバー、V・ダラス・メリル、ロバート・E・ウエルズ

編集長：レックス・D・ピネガー  
教科課程管理部実務部長：ロナルド・L・ナイトン  
教会機関誌ディレクター：トーマス・L・ピーターソン

国際機関誌

編集主幹：ブライアン・K・ケリー  
編集主幹補佐：マービン・K・ガードナー  
編集副主幹：デビッド・ミッチェル  
編集補佐/子どものページ：ディエーン・ウォーカー

工程管理：トム・フォセット  
チーフアートディレクター：M・マサト・カワサキ  
アートディレクター：スコット・D・バン・カンペン  
デザイナー：シェリー・クック  
制作：レジナルド・J・クリステンセン、ステイブ・テイトン、ジェーン・アン・ケンプ、デニス・カービー

配送部長：ジョイス・ハンセン  
聖徒の道 1993年2月号第37巻第2号  
発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会  
〒106 東京都港区南麻布5-10-30  
電話 03-3440-2351  
印刷所 株式会社 精興社/クロスロード  
定価 年間予約/海外予約2,200円(送料共)  
半年予約 1,100円(送料共)  
普通号 150円, 大会号 350円

Copyright © 1993 by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. All rights reserved. Printed in Japan. 英語版承認—1991年10月 翻訳承認—1991年10月 原題—International Magazine February 1993. Japanese. 93982300.

●定期購読は、「聖徒の道」申し込み用紙」でお申し込みになるか、または現金書留か郵便振替(口座名/末日聖徒イエス・キリスト教会 振替口座番号/東京0-41512)にて管理本部経理課へご送金いただければ、直接郵送いたします。●「聖徒の道」のお申し込み先…〒106東京都港区南麻布5-10-30管理本部経理課 ☎03-3440-2351(代表) ●「聖徒の道」の配送についてのお問い合わせ…〒213川崎市高津区溝の口131/末日聖徒イエス・キリスト教会 資材管理部配送センター ☎044-811-0417

The Seto No Michi (ISSN 0385-7670) is published monthly by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 50 East North Temple, Salt Lake City, Utah 84150. Second-class postage paid at Salt Lake City, UT 84150. Subscription price \$14.00 a year. \$1.50 per single copy. Thirty days' notice required for change of address. When ordering a change, include address label from a recent issue; changes cannot be made unless both the old address and the new are included. Send U.S.A. and Canadian subscriptions and queries to Church Magazines, 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, U.S.A. Subscription information telephone number 801-240-2947.

POSTMASTER: Send address changes to Seto No Michi at 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, U.S.A.

## 読者からの便り

### 証を強めてくれました

教会に出会ったのは、12年前のことです。モルモン経に対する宣教師の証に感動しました。

改宗後1年以上して、私は重い病気で入院しました。その時「聖徒の道」(日本語版)とモルモン経に本当に感謝するようになりました。病気という試練の間、私はそれらによって慰めを得、みたまを感じる事ができたからです。今は全快し、健康に感謝しています。証を強めてくれて、ありがとうございます。

東京ステーキ部  
吉祥寺ワード部  
中山理恵子

### 予言者の写真

「リアホナ」(ポルトガル語版)のすばらしい写真と記事に感謝しています。「リアホナ」はいつも靈感を与えてくれます。

私の家族は家庭の夕べでいつも「リアホナ」の写真を使います。歴代大管長の写真をもっと載せてください。写真は子供たちが教会の偉大な指導者たちを覚える助けとなりますし、彼らの伝記は私たちの証も強めてくれます。

ブラジル, サンパウロ  
サンパウロ北ステーキ部  
テイラー・サムウェーズ

編集室から——1992年12月号に掲載された予言者ジョセフ・スミスの記事を皮切りに、教会の歴代大管長の伝記物語をシリーズで紹介します。ブリガム・ヤング大管長の記事については、今月号の10ページをご覧ください。

### 門戸を開く

「リアホナ」(スペイン語版)は、福音を実践する会員たちの模範を知らせてくれるので、私の証はいつも強められてきました。「リアホナ」で学んだことを、職場で、教会のレッスンで、生活の中で、役立てています。友達や職場の同僚に福音を紹介するときにも利用しています。

『モルモンメッセージ』のポスターを毎月掲載していただけないでしょうか。このポスターのおかげで福音を紹介するたくさんの方の機会を得ているからです。というのも、この部分を切り離して、私が通う学校の掲示板に実際にはることができるからです。教授や級友たちが来てポスターを見て、宣教師の話に興味を持つようになっています。

カリフォルニア州  
パームスプリングズステーキ部  
パームスプリングズワード部  
マックス・シャバリア

### 編集室から

世界中の愛読者の皆さんにとっても感謝しています。皆さんの手紙、記事、物語などをお寄せください。どの国の言葉でも結構です。(投稿の際は、住所、氏名、ステーキ部/地方部/伝道部、ワード部/支部名を明記してください)これまでいただいたお便りに感謝するとともに、これからもさらに多くのお便りをお待ちしています。あて先は下記のとおりです。

International Magazines,  
50 East North Temple Street,  
Salt Lake City, Utah 84150  
U.S.A.



# イエスが 歩まれた道

第二副管長  
トーマス・S・モンソン

**何**年も前の寒い12月のことでした。ソルトレークシティにあるタバナクルに集まった私たちは、それまで愛し、尊敬し、つき従ってきたハロルド・B・リー大管長の葬儀に参列し、弔辞を述べました。大管長の予言の言葉、力強い指導力、そして献身的な奉仕は、完成を目指して進みたいという望みを私たち全員に与えたものです。リー大管長は、「神の戒めを守り、主の歩まれた道に従いなさい」と力強く勧告されました。

後日、ソルトレーク神殿の階上にある非常に神聖な部屋で、リー大管長の後継者が選ばれ、支持を受け、その聖なる職に任命されました。たゆまぬ働きと謙遜な態度、そして靈感に満ちた証をもって、スペンサー・W・キンボール大管長は私たちに、リー大管長の定められた進路に引き続き従っていくよう勧められました。そして、キンボール大管長もリー大管長と同じ味わい深い言葉を述べられました。「神の戒めを守り、主の歩まれた道に従い、その足跡をたどりなさい。」今日、エズラ・タフト・ベンソン大管長もまた同様の力強い勧告を与えておられます。

イエスの言葉が唇にあり、イエスのみたまが心に宿っていれば、またイエスの教えが生活に溶け込んでいけば、ある意味において私たちは、この世の旅路を歩きながら、イエスの歩まれた道を歩むことができます。

悪魔はイエスに、「もしあなたが、ひれ伏してわたしを拜むなら」この世のすべての国々を与えると誘惑しました。すると主はこう答えられました。「サタンよ、退け。『主なるあなたの神を拜し、ただ神にのみ仕えよ』と書いてある。」(マタイ4：8-10)

ある日の夕方、私は数日前に届いていた旅行代理店のパンフレットに何げなく目を留めました。目を見張るような色彩で印刷されたそのパンフレットには、説得力のある宣伝文句が載っていました。内容はノルウェーのフィヨルドからスイスのアルプスまでの団体旅行でした。そしてほかにも、聖地ベツレヘム、すなわちキリスト教揺籃ようらんの地を訪ねる企画も紹介されており、パンフレットの一番下に、簡潔ながらも鮮烈な呼びかけが書いてありました。「さあ、イエスが歩まれた道を歩いてみましょう。」

イエスの言葉が唇にあり、イエスのみたまが心に宿っていれば、またイエスの教えが生活に溶け込んでいけば、ある意味において私たちは、この世の旅路を歩きながら、イエスの歩まれた道を歩むことができます。イエスに倣って、未来に確信を抱き、天父に対する信仰を堅持しながら、また隣人に純粋な愛を抱きつつ、歩むことができるように願っています。

イエスは失意の道を歩まれました。

聖なる町のことで悲しまれたイエスの嘆きが私たちにどれほどわかるのでしょうか。イエスは言われました。「ああ、エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、おまえにつかわされた人々を石で打ち殺す者よ。ちょうどめんどりが翼の下にひなを集めるように、わたしはおまえの子らを幾たび集めようとしたことであろう。それなのに、おまえたちは応じようとしなかった。」(ルカ13：34)

イエスは誘惑の道も歩まれました。

かの悪魔は、あらん限りの力を振り絞って、巧みに詭弁きべんを弄し、40日40夜断食して「空腹になられた」主を誘惑しました。次のように挑発したのです。「もしあなたが神の子であるなら、これらの石がパンになるように命じてごらんささい。」イエスは答えられました。「人はパンだけで生きるものではない。」

すると悪魔は言いました。「もしあなたが神の子であるなら、下へ飛びおりてごらんささい。『神はあなたのために御使たちにお命じになると、あなたの足が石に打ちつけられないように、彼らはあなたを手でささえるであろう』と書いてありますから。」イエスは彼に言われ

ました。「主なるあなたの神を試みてはならない。」

さらに悪魔の誘惑は続きます。「もしあなたが、ひれ伏してわたしを拜むなら、……〔この世のすべての国々とその栄華とを〕……あなたにあげましょう。」すると主はこう答えられました。「サタンよ、退け。『主なるあなたの神を拜し、ただ神にのみ仕えよ』と書いてある。」(マタイ4：2-10)

またイエスは苦難の道を歩まれました。

ゲツセマネでの苦悩を考えてみましょう。『父よ、みこころならば、どうぞ、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの思いではなく、みこころが成るようにしてください。』……イエスは苦しみもだえて、ますます切に祈られた。そして、その汗が血のしたたりのように地に落ちた。(ルカ22：42, 44)

あの十字架の残忍さを忘れることのできる人がいるでしょうか。主は言われました。「わたしはかわく……すべてが終わった」と。(ヨハネ19：28, 30)

もし機会がありながらそれを逃したり、権利を誤用したり、愛する者に教えることを怠ったりするならば、きっと私たちも失意の道を歩むことになるでしょう。私たちはまた誘惑の道にも出遭うでしょう。「さりながら、悪魔が人の子らを試むるは是非必要なり。すなわち人は悪魔の誘惑なければ己が自由意志を使い得ず」(教義と聖約29：39)とあるからです。

同様に私たちは苦難の道をも歩むでしょう。私たちは羽根布団に横たわったままで天に昇ることはできません。世の救い主は、非情な苦難に遭われてから天に昇られたのです。僕である私たちが主より安易な道を期待できるでしょうか。復活祭の勝利の前には十字架上の苦しみが必要ならぬのです。

しかし、こういったつらく悲しい道を歩むと同時に、私たちはまた永遠の喜びをもたらす道をも歩むことができます。

私たちはイエスと共に従順の道を歩むことができます。

それは決してやさしいことではありません。「彼は御子であられたにもかかわらず、さまざまの苦しみによって従順を学」ばれました。(ヘブル5：8)サムエルが残した言葉を私たちの標語としようではありませんか。



GET THEE HENCE, SATAN, BY CARL HEINRICH BLOCH. ORIGINAL IN THE CHAPEL OF FREDERIKSBORG CASTLE, DENMARK. USED BY PERMISSION OF THE FREDERIKSBORGMUSEUM.

「見よ、従うことは犠牲にまさり、聞くことは雄羊の脂肪にまさる。」(サムエル上15:22)不従順がもたらす結末は束縛と死です。一方、従順の報いは自由であり、永遠の生命なのです。

私たちはイエスのように奉仕の道を歩むことができます。

人々の間で教え導いたイエスの生涯は、善意の光を放つサーチライトにもたとえられるものです。イエスは手足のなえた人に力を与え、盲人の目に視力を、耳が不自由な人に聴力を、そして死者の体に生命を与えました。

イエスのたとえ話は力ある教えです。良きサマリヤ人のたとえ話でイエスは、「あなたの隣り人を愛せよ」(ルカ10:27)と教えられました。姦淫<sup>かんいん</sup>の現場を捕らえられた女をやさしく扱うことによって、イエスは慈愛をもって理解しなければならぬと教えられました。またタラントのたとえによって、私たち一人一人に自己を向上さ

せ、完成を目指して努力するように教えられました。イエスをご自分の歩まれた道に沿って私たちが人生の旅路を前進できるよう、周到な準備をされたのです。

最後にイエスは祈りの道を歩まれました。

私たちは、時を超えて価値を持つ3つの祈りから、3つの偉大な教訓を得ることができます。最初はイエスが伝道しておられた時のものです。主は言われました。「祈るときには、こう言いなさい、『父よ、御名があがめられますように。』」(ルカ11:2)

第2はゲツセマネの祈りです。「わたしの思いではなく、みこころが成るようにしてください。」(ルカ22:42)

第3は十字架の上から言われたものです。「父よ、彼らをおゆるしくください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです。」(ルカ23:34)

この祈りの道を歩むなら、私たちは天父と交わり、天父の力を受けることができます。

イエスが歩まれた道を歩む信仰を、そして希望を持つようではありませんか。歴代の神の予言者、聖見者、啓示を受ける者たちが、そうするよう私たちに呼びかけているのです。私たちはただ彼らに従えばよいのです。すなわち、予言者の歩んだ道を一步一步踏みしめて行けばよいのです。

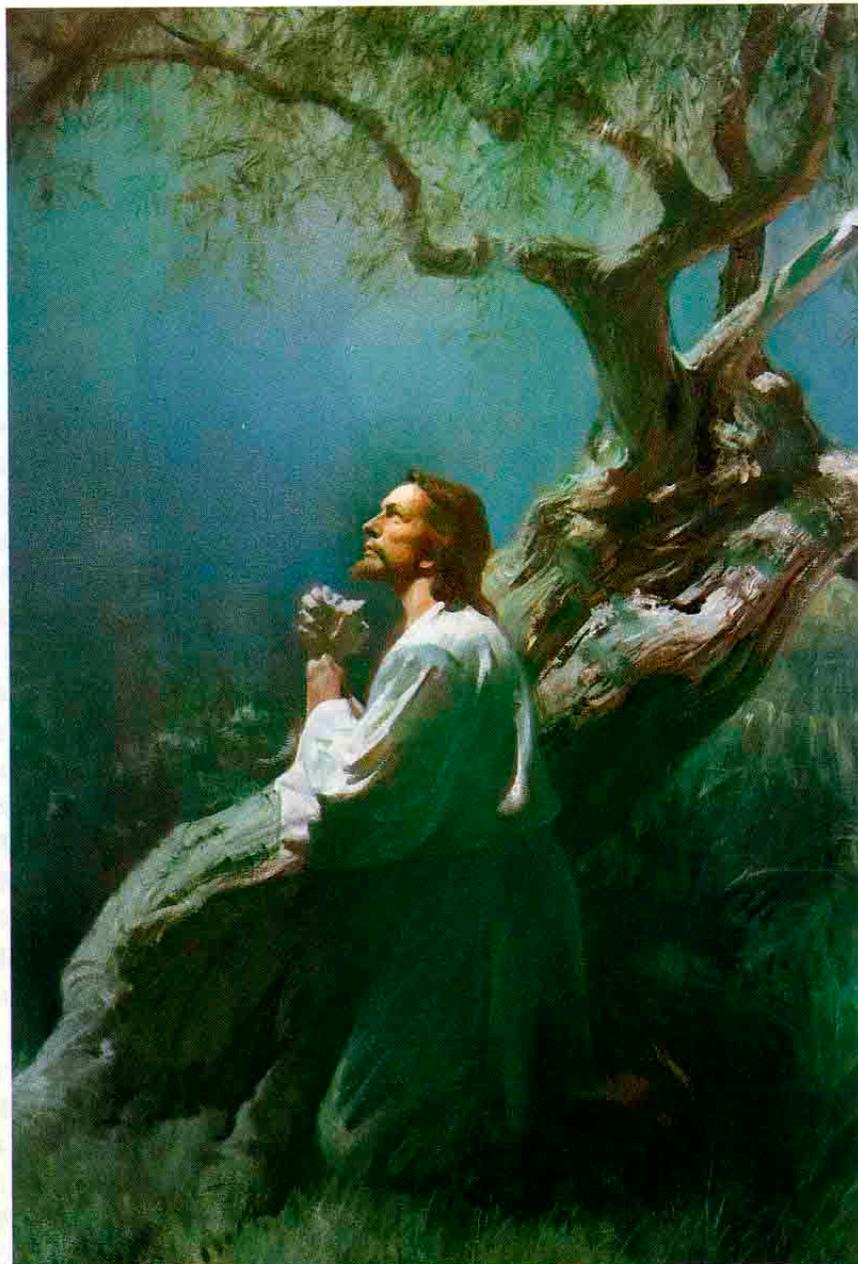
私が初めてキンボール大管長とお会いしたのは、何十年も前のことでした。当時キンボール大管長は十二使徒定員会会員として、私はここソルトレークシティで若い監督として働いていました。ある朝、かかってきた電話を取ると、次のように語る声が聞こえてきました。「スペンサー・W・キンボール長老です。お願いしたいことがあって電話しました。あなたのワード部で、第5南通りに面した大きなビル<sup>ビル</sup>の裏に、小さな目立たないトレーラーハウス(訳注——車で引く移動住宅)があります。

そこにナバホ族の未亡人マーガレット・バード夫人がいます。バード夫人は、自分が役に立たないつまらない者であると思って、気力を失っています。扶助協会の会長会とご一緒にバード夫人を訪問し、友情の手を差し伸べ、特別に彼女に温かい言葉をかけてあげてくださいませんか。」私たちはそのとおりに実行しました。

やがて奇跡が起りました。マーガレット・バード夫人は、新たに見いだした環境の中で生氣を取り戻し、見違えるように明るくなったのです。失意は消え去りました。苦悩の中にあった未亡人は訪れを受けました。つまり失われた羊が見いだされたのです。このひとつのドラマに参加した一人一人も成長することができました。

しかし実は、この場合の本当の羊飼いは、自分の責任下にある99匹を置いて、失われた貴いひとりの人間を氣遣って探索に出かけたこの使徒でした。スペンサー・W・キンボール大管長はイエスが歩まれた道を歩まれたのです。

イエスの歩まれた道を歩むとき、イエスの足音に耳を傾けようではありませんか。手を伸ばして大工イエスの手に触れようではありませんか。そうすればイエスを知るようになるでしょう。主は湖のそばでご自分を知らない者たちの所へ来られた時のように、名もなく見知らぬ人のように私たちの所へ来られるかもしれせん。イエスは昔と同じように「あなたは、わたしに従ってきなさい」と私たちに呼びかけ、今の時代に果たさなければならぬ仕事を私たちに課せられるのです。イエスは戒めを与えられます。そして人がそれに従うとき、その人が賢明であるか単純であるかを問わず、主のみ力を受けつつ、苦勞や葛藤、災難を克服していくうちに、主はご自身について明らかにされるのです。すなわち、人々は自



CHRIST IN GETHSEMANE, BY HARRY ANDERSON

分自身の経験を通して主がどのようなお方かを知るようになるのです。

私たちはイエスがベツレヘムの赤子や大工の息子以上のお方であり、いかなる教師よりも偉大な教師であることを知るでしょう。すなわちイエスは神の御子であると知るようになるのです。イエスは彫像を作ることも、絵を描くことも、あるいは詩を書くことも、軍隊を率いることもされませんでした。王冠をかぶることも、王の笏を持つことも、肩に紫色の衣をかけることもされませんでした。イエスの赦す度量には枠がなく、忍耐は尽きることを知らず、勇気にも限界がありませんでした。

イエスは人を変えられました。人の習慣、考え、野心を変えられました。人々の気質、態度、性質をも変えら

イエスのように祈りの道を歩むなら、私たちは天父と交わり、天父の力を受けることができる。

れました。つまり、人々の心を変えられたのです。

ここで、私たちになじみ深い、使徒の頭であったペテロについて考えてみましょう。彼はシモンと呼ばれる漁夫でした。信仰が薄く、疑い深い、性急なペテロは、イエスが大祭司の元へ連れていかれた夜のことを忘れられませんでした。この夜、群衆は「[救い主]につばきをかけ、目隠しをし、こぶしでたたき……はじめた。また下役どもはイエスを……手のひらでたたいた。」(マルコ14:65)

たとえ一緒に死ぬようなことになっても、決してあなたを知らないなどと言わないと約束したペテロはどこにいたのでしょうか。聖なる記録には次のように記されています。「ペテロは遠くからイエスについて行って、大祭司の中庭まではいり込み、その下役どもにまじってすわり、火にあたっていた。」(マルコ14:54)この夜ペテロは主の予言どおりイエスを知らない、3回否定しました。主は突かれたりあざげられたり、また殴られたりして辱めを受けましたが、それでも声ひとつ上げず威厳を保っておられました。そして振り返ってペテロを見られました。

ある歴史学者はペテロに生じた変化を次のように書いています。「これで十分であった。……[ペテロには]もう危険という言葉は存在しなかった。もはや死を恐れることもなくなった。……[彼は]外へ飛び出して、……朝が白みかけるのを待った。……この悲嘆に暮れ、深く罪を悔いた使徒は自分の良心に責められて[立っていた]。そこで過去の生活、恥、弱点、そして過去の自分などはすべて、敬虔な悲しみの中に押し殺し、新たに高貴な誕生を迎えたのであった。」(フレデリック・W・ファーラー「キリストの生涯」p.604)

次にタルソのサウロについて考えてみましょう。学者であったサウロは、律法学者の書物に通じていました。今日の学者の中にも、この書物を非常な知識の宝庫としている人々がいます。しかし何らかの理由でこれらの書物もパウロの心を満たしませんでした。そしてこう叫び続けました。「わたしは、なんとというみじめな人間なのだろう。だれが、この死のからだから、わたしを救ってくれるのだろうか。」(ローマ7:24)とある日、

パウロはイエスに会い、実にすべてが新しくなったのです。その日から死に至るまで、パウロは人々に「古き人を脱ぎ捨て」、「真の義と聖とをそなえた神にかたどって造られた新しき人を着るべきである」(エペソ4:22, 24)と説き続けました。

時の経過も人の生活を変える贖い主の能力を変えはしませんでした。主は死んだラザロに言われたように、今日も私たちに「出てきなさい」(ヨハネ11:43)と呼びかけておられます。疑う心から生じる絶望から「出てきなさい」と言っておられるのです。

また、罪の悲しみや不信仰という死から出てきなさい、新しい生命にいで来れ、出てきなさい、と呼びかけておられるのです。

そのような傾いから出て、イエスが歩まれた道に沿って歩むとき、イエスが語られた次の証を思い出しましょう。「見よ、われはイエス・キリストなり。予言者らがこの世に来ると証をしたるその者なり。われは世の光にしてまた世の生命なり。」(IIIニーフアイ11:10-11)

「われは始めなり終りなり。われは生ける者なり殺されたる者なり。父と汝らの間の仲保者なり。」(教義と聖約110:4)

イエスの証に私の証を付け加えたいと思います。主は生きておられます。□

### 話し合いのポイント

1. イエスの言葉が私たちの唇にあり、イエスのみたまが私たちの心に宿っていれば、またイエスの教えが私たちの生活に溶け込んでいけば、私たちはこの世の旅路を自信を持って歩むことができる。

2. 私たちはイエスに倣って、未来に確信を抱き、天父に対して信仰を堅持しながら、また隣人に純粋な愛を抱きながら歩むことができる。

3. 私たちは、失意、誘惑、苦難を乗り越える能力を伸ばすことができる。

4. 私たちは、祈りを通して神と交わり、さらに従順な者、人に仕える者となることができる。

# 絵本からの証

マーリ・ソーバンソーング

**ラ** オスの仏教の家庭で少女時代を過ごした私には、キリストやキリスト教について聞く機会などありませんでした。しかし、国内の混乱で、私たち家族は自国を離れなければならず、最終的にはアメリカに移り住みました。この地で私は末日聖徒イエス・キリスト教会の宣教師に出会い、イエス・キリストと、その真の教会について学び、1989年6月にバプテスマを受けました。

1990年11月26日、日曜日、マサチューセッツ州のリンフィールドにあるアジア支部からバスに乗って家に帰る途中のことです。私は11歳の女の子とその子の6歳になる弟のそばに座りました。ふたりを教会で見かけたことはありましたが、名前は知りませんでした。しかし、彼らがまだ教会員でないのは知っていました。

その女の子は聖書の物語をつづった子供向けの本を開き、ページをめくりながらきれいな絵を見ていました。「ねえ見て。」驚いて女の子が指したのは、激しい痛みを表情に浮かべながら、岩の傍らでひざまずき祈っておられるイエス・キリストの絵でした。

彼女は私の方を向いて尋ねました。

## 1冊の絵本と 子供が尋ねた ひと言のおかげで、 キリストに対する 自分の信仰の深さに 気づきました。

「どうしてイエス様はこんなに苦しもうなの？」

「それはね、イエス様はすべての人の罪を背負われたからよ。イエス様は苦しみでいっぱいなの。」

女の子はさらに尋ねてきました。「どうして？」

「じゃあその本、読んであげましょうか。」

私はイエスがひざまずいて祈っておられる部分から読み始めました。読みながらその物語についてふたりに説明していると、子供たちがその内容をよく理解しているのがわかりました。イエスが十字架にはりつけにされている

絵を見た時、ふたりは悲しそうな表情になり、イエスが復活された絵を見ると、とてもうれしそうにしていたからです。

私はその本の物語を全部、自分の言葉でわかりやすく説明しました。そして今度は私の方からいくつか質問をすると、ふたりは競って手を挙げ、話したがりました。

最後に、その小さな女の子が私を見上げてこう尋ねました。「これ、本当のお話なの？」

私は彼女の目を見つめて答えました。「ええ、もちろん本当のことよ。」

そう答えた時、私自身も、その話が確かに真実であると知りました。自分がキリストについて強い証を持っていることに気づいたのです。つまり私は、真実であると心の奥で知っていた事柄について、証をしたわけです。その場には、みたまがありました。はっきりとそう感じました。心の中が温かくなり、平安と愛の気持ちで満たされたのです。

それ以来、私は世界中の人々にイエス・キリストについて話したいと思うようになりました。すべての人々にこの喜びを感じてもらいたいです。□



# ブリガム・ヤング と社会的責任

アーサー・R・バセット



**変**化のない生活に満足している人がいる一方、人生とはどうあるべきかを常に考え、夢を実現するために力の限りを尽くし、あらゆることをやってみるまでは、決して満足しない人もいます。

ブリガム・ヤングはその後者のタイプです。31歳の時に福音の教えに改宗したヤングは、様々な可能性を夢に描いていました。そしてその夢は、ひたすら、地上に神の王国を建設することに向けられていました。ヤングにとってこの王国とは、空想に終わる夢ではなく、現実に実現可能なものでした。新しい生き方、新しい社会体制を作りあげることだったのです。ヤングは、エレミヤの言葉を借りて表現すれば、「燃える火の〔彼の〕骨のうちに閉じこめられている」（エレミヤ20：9）ような状態になるまで、絶えずその夢を念頭に置いていました。

ヤングはこう言っています。「私は予言者ジョセフ・スミスを知っていると思うと、どんな時でも、ハレルヤと叫び出したくなる。……私たちには、ジョセフの始めた〔神の王国を築くという〕み業を継続していく力が与えられている。その力によって、人の子の再臨のためにあらゆる備えができるのである。これは末日聖徒に託された一大事業である。そして、今かかわらな

ければならない事業はこれだけである。」（『説教集』3：51。下線付加）

神の王国を建設するというこの「事業」は、ヤングの目標にも、人生にも大きな影響を与え、最終的にはヤングの永遠の行く末にも大きく影響を及ぼしました。

ブリガム・ヤングのように、そのような目標に夢中になれる人は、なんと幸せなことでしょうか。ヤングは、目標が意義深いものであれば、とりわけその目標が地上に神の王国を建設するというものであれば、どんな犠牲でも喜んで払う覚悟でいました。この目標に向かって進んだことで、ニューヨーク州メンドンの大工であったヤングの生涯は、完全に変わりました。実際に行動を起こしたヤングは、大陸の反対側にあるユタ州のソルトレーク盆地に、彼の家庭を、そして教会の中心となる場所を築きあげるまで、決して腰を落ち着けることはなかったのです。

1832年の早春、雪模様の中でバプテスマを受けたブリガム・ヤングは、そのまま岸辺で確認の儀式を受け、さらにそこから3キロほど離れた自宅へ戻り、そこで長老に聖任されました。ぬれた衣服が背中に張りついたまま、乾く間もありませんでした。この年は、ヤングにとって忘れられない1年でした。最初の妻を亡くし、予言者ジョセフ・スミスと初めて会ったのがこの年だったからです。そしてこの年が終わらぬうちに、ヤングは再び雪の中へ出て行きました。このたびは、新しく見つけ出した人生観をカナダに住む友人たちに知らせたいと考えてのことでした。

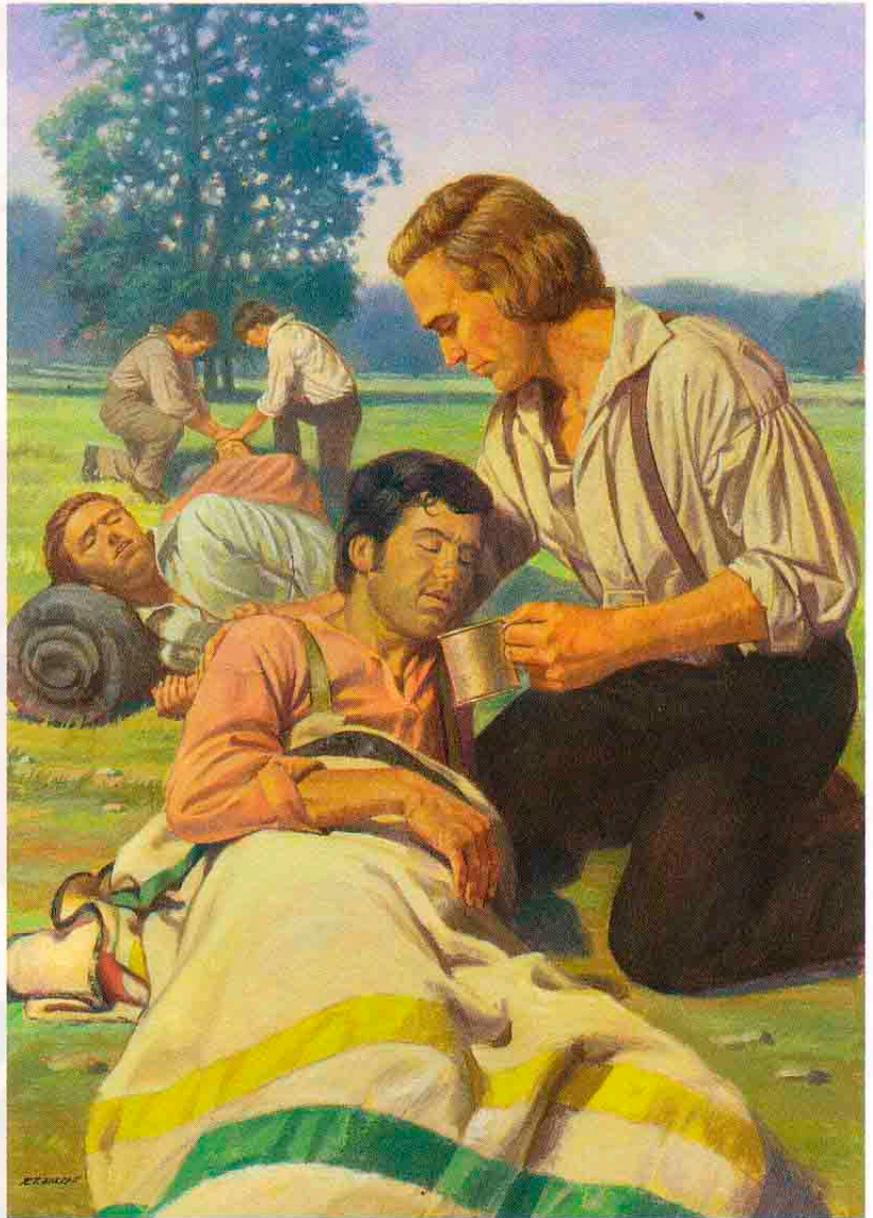
12月の寒さの中を、ブリガム・ヤングと弟のジョセフは、カナダの内陸部にあるキングストンに向けて歩き出しました。この旅で、ふたりの若き長老は、深い泥土の層の上にひざまで埋まるほど積もった雪の中を、400キロも歩いたのでした。泥土の上に積もった雪の中を苦勞して歩いた経験のある者

上——このブリガム・ヤングの写真は、1851年の50歳の誕生日に撮影したものと考えられている。右——1876年ヤングが75歳の時に撮影したもの。

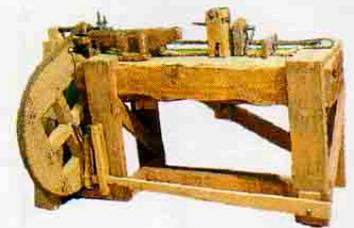




上—ブリガム・ヤングの<sup>いしよろ</sup>衣装類の一部。ズボン<sup>いしよろ</sup>はヤングがイギリスで購入したものと思われる。シルクハット、羊革のブーツ、ステッキ。右—ミズーリ州の暴徒から聖徒たちを救出するため、人々はコレラに冒されながら1,600キロもの距離を行軍した。ジョセフ・スミスは、その際病人の世話のために最も活躍した者のひとりとして、ブリガム・ヤングの名前を記録にとどめている。



ILLUSTRATED BY ROBERT T. BARRETT; PHOTOGRAPHS OF ARTIFACTS BY JED CLARK, RON READ, AND MATT REIER



上—ブリガム・ヤングの家具用木工機械。左—ニューヨーク州シュガーヒルの、ある農家の入り口の装飾。ブリガム・ヤングが建築を手伝ったもの。窓もガラス工としての彼の優れた技術をよく示している。

にしか、このふたりの宣教師が味わった大変な苦難を想像することはできないでしょう。さらに悪いことに、この旅程のうち10キロ近くは、氷の上でした。しかも、その氷は薄くて、割れると足首の深さまで潜り、「靴の下半分」まで水がしみ込んでくるほどでした。

このふたりの宣教師はその地域で2カ月にわたって伝道を続け、45人にバプテスマを施しました。自分はゆだねられている召しにふさわしくないと考えている人は、ブリガム・ヤングにとっても伝道活動は決して楽ではなかったことを知って、心が安らぐかもしれません。ヤングは自分自身を振り返って、こう書いています。「おそらく、自分ほど口下手な人間もほかにはないだろう。……

人々に何か伝えたいと思っても、それをうまく表現できる言葉が見つからないとき、私はどれほど苦しい思いをしてきたことだろうか。それでも、私は常に最善を尽くそうと決心していた。」(「説教集」5:97)

翌年、ブリガム・ヤングは2度目の伝道に出かけました。その後ようやくオハイオ州カートランドに彼の小さな家族と共に定住し、この地で予言者ジョセフ・スミスをさらに深く知るようになるのです。2度目の伝道の結果、彼の働きによってさらにもう20人が王国に導かれました。そして、ヤングはその人々を連れてカートランドまでやって来たのです。その光景は、後に聖徒の群れを率いて西へ向かうヤングの姿をほうふつとさせるものがありました。オハイオ州北部のカートランドという静かな小さい町に居を構えたブリガム・ヤングは、予言者ジョセフ・ス

ミスの下で、心の清い者が住む町、すなわちシオンについて学び始めました。

シオンのために大きな犠牲を払う出来事が、1834年にも起こりました。この時、ブリガム・ヤングはジョセフ・スミスに同行して、シオンの陣営と呼ばれた行軍に参加することになります。ミズーリ州にいた聖徒たちが、暴徒に家を追われ、救援を求めているという知らせが、カートランドに届いた時のことでした。カートランドに住む兄弟たちにすぐさま救援の訴えが伝えられました。その結果、ジョセフ・スミスをはじめとする205人がこの救援の嘆願に応じることになりました。力には力で対抗されることになるかもしれません。この行軍に参加した人たちは、1,600キロ先の行軍の終わりには死を待っているかもしれないことを、皆承知していたのです。

ブリガム・ヤングの時代の人々は皆、長距離を歩くのには慣れていましたが、この行軍だけは別でした。ヤング大管長は、後年その時のことを回顧して、宣教師として働いている時には、何か月も靴の中を血だらけにして歩き回ったものだが、その伝道活動でさえ、初夏の暑さの中を毎日歩き続けるこの行軍の厳しさに比べたら物の数ではなかった、と語っています。

行軍が進むにつれ、疲労もピークに達し、忍耐も限度を超え、つまらないことで怒る者も出てきました。そして、恐ろしいコレラに襲われたのです。甚だしい腹痛に見舞われ、急死する者もいました。その2年前、北アメリカではコレラが大流行していたため、その症状についてはだれでも知っていました。下痢、発作的なおうと、激しい腹

痛に襲われ、やがて脱水症状を起こし、顔面がそうはくとなってやつれ、手足が冷たく暗紫色になって、皮膚がカサカサになるのです。

1日で死ぬこともあれば、1時間しかもたないこともあります。ときには、まるでおので切り倒されたかのように、突然前かがみになって絶命する犠牲者すらいる有様でした。シオンの陣営に加わっていた者の中には、逃走を企てる者もいましたが、ブリガム・ヤングはそのまま陣営にとどまりました。ジョセフ・スミスは、病人の世話と死者の埋葬に当たって最も活躍した者として、ブリガム・ヤングの名前を記録に残しています。

シオンの陣営での経験の後しばらくして、ブリガム・ヤングは1835年に組織された近代における最初の十二使徒定員会の会員のひとりに召されました。新しい召しを受けたブリガムは、様々な変化を経験し、新たに加えられた責任の重さを実感することになります。しかし、彼の人生の目標は、それまでと何ら変わることがありませんでした。それは、ジョセフが始めたみ業を継続し、人の子の再臨の前にあらゆる備えをすることでした。

ブリガム・ヤングの使徒時代の出来事の中から、この目標達成のためにひたすら邁進し続けたことを物語る事件をふたつ紹介しましょう。両方とも、1839年の出来事です。

ひとつは2月に起きた出来事です。当時、ジョセフ・スミスはリバティエールの牢獄にとらえられていたため、ブリガム・ヤングが十二使徒定員会の会長として教会運営の指揮を執っていました。当時の最大の問題は、聖徒たちを

ミズーリ州からイリノイ州へ移住させることでした。多くの人々は貧困にあえいでおり、引越す用意が整っている者はほんの一握りでした。この少数の人々の心には、自分の命さえ助かるものなら一刻でも早く脱出したいという誘惑が強まっていました。しかし、ブリガム・ヤングは、神の真の聖徒ならそのような行動はとるべきではないと考えました。人が互いに愛や思いやり、関心を抱き合わない限り、決して社会を維持していくことができないのは、明らかだったからです。

そのため、集会が招集され、誓約が交わされました。すなわち、その誓約書に署名した者は、貧しい人々をひとり残らず助けて、一緒に撤退できるようになるまでは、決して置き去りにしないと誓ったのです。ブリガム・ヤングとその家族は、ヒーバー・C・キンボール(キンボール長老自身は、ミズーリ州に残ることになった)の家族と共に厳寒の2月に、幌馬車隊をイリノイ州に向けて出発させました。この大移動は、モルモンの移住の歴史の中でも、特異な部隊のひとつとなりました。

ミズーリ州の凍結した大平原を32キロほど進むと、ブリガム・ヤングはそこで馬車を止め、妻と5人の子供のために仮住まいを作ると、再び出発地点に取って返しました。そして、何人かの貧困にあえぐ聖徒たちを乗せ、その持ち物を積み込むと、再び家族のいる地点へと戻るのです。このようにして、彼は結局、ほかの大部分の人が進んだ距離の3倍に相当する距離を旅したのです。やがて、イリノイ州クインシーの最終到着地点で、心に残る集会が開かれます。この集會中、クインシーに

到着した聖徒たちは、まだ50家族がファーウエストに残っていて、しかも貧しくて出発できない状態にあることを知らされました。集まった聖徒たちは、ここでもう一度心を合わせ、帽子やコート、靴といったわずかに残された持ち物売り払ってでも、貧しい聖徒たちの移動のための資金を捻出することを提案しました。ブリガム・ヤングはその時のことを、次のように記録しています。

「私たちはパンを割いて、聖餐をいただいた。この集會の終わりには、合計50ドルの献金があり、困窮した兄弟姉妹を救出するために幌馬車隊を出すことを約束してくれた人も何人かいた。そうした約束をしてくれた人の中に、ウォーレン・スミス兄弟の未亡人もいた。夫と子供をハウズミルの虐殺事件で殺された女性である。彼女は、自分に残されたたった1台の幌馬車を、この愛に満ちた特別な計画のために提供したのである。」

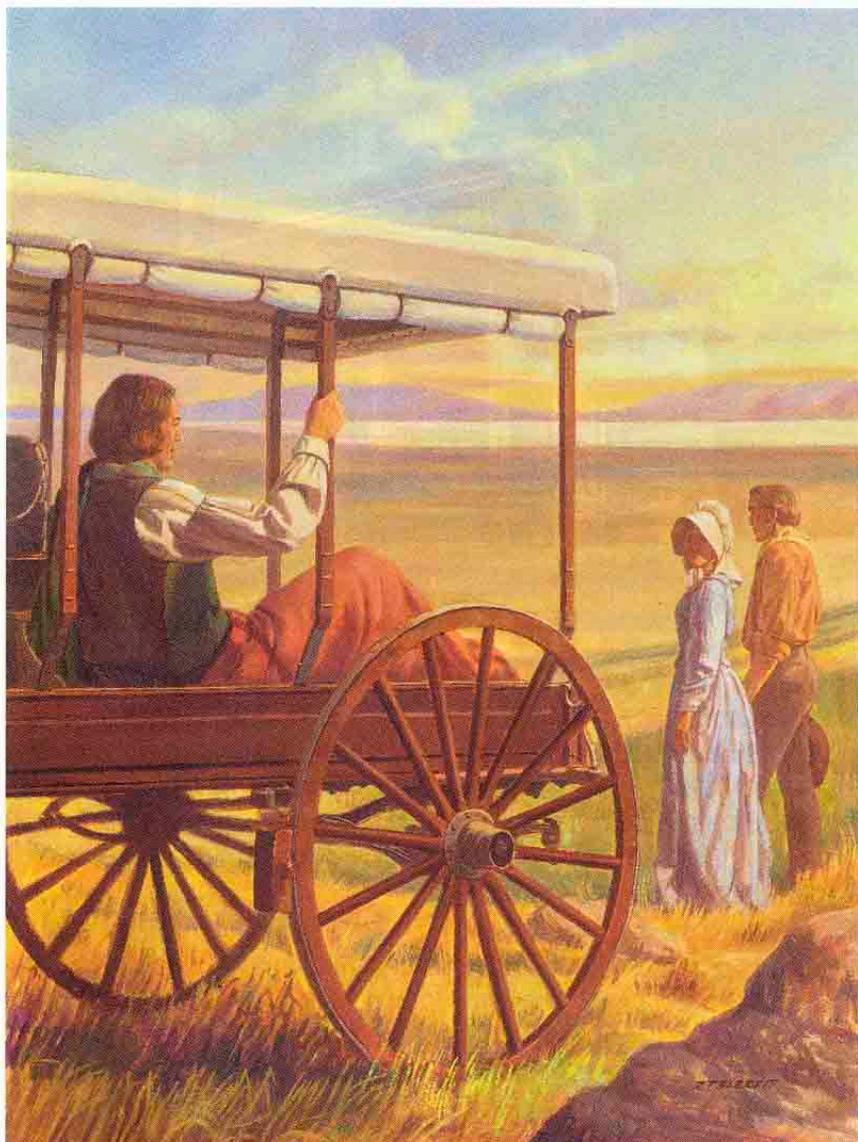
こうした一連の経験を通じて、ブリガム・ヤングは、人は互いに愛し合いながら暮らせること、また愛と関心を抱き合うことを基盤にした、もっとクリスチャンらしい社会を作り出す力を確かに備えていることへの確信をますます強めていきました。

この同じ年に起きたもうひとつの出来事も、神の王国を建設するためなら、いかなる犠牲もいとわないとするブリガム・ヤングの決意の強さを表わすものです。1839年9月から1840年2月までの間の出来事で、イギリスへの伝道にかかわることです。

ここでは、ブリガム・ヤングのニューヨーク州への旅のことを重点的に取

り上げることにしましょう。十二使徒たちには、特別な伝道に出かける時期がすでに到来していることを告げられていました。しかし、ブリガム・ヤングは、ほかの多くの兄弟と同様、マラリヤの症状に苦しんでいました。この時、アイオワ州モンローズにいたヤングは、体のあらゆる部分に痛みを覚えながらも、ベッドからようやくのことで抜け出し、旅支度を始めます。自分のコートもなかったヤングは、代わりに揺りかごから上掛けを取り出し、それで身を包みました。子供たちも皆、高熱のために伏せています。妻もまた病気で、その上、生まれて10日しかたっていない赤ん坊の世話をする人も必要でした。ヤングの家からミシシッピ川までは、わずか150メートルしかなかったのですが、ヤングはその川岸まで歩いていくことすらできない状態でした。隣人が馬車を出してくれ、ヤング会長はやっとのことで馬車の上にはい上がりました。川岸で出会った人から、船に乗せてもらって対岸まで着くと、そこでイスラエル・バーロウの用意した馬に乗せられて、ようやくのことでノーヴーンにいるヒーバー・C・キンボールの家に着きました。家に入って倒れ込んだヤングは、それから4日間立ち上がることもできませんでした。

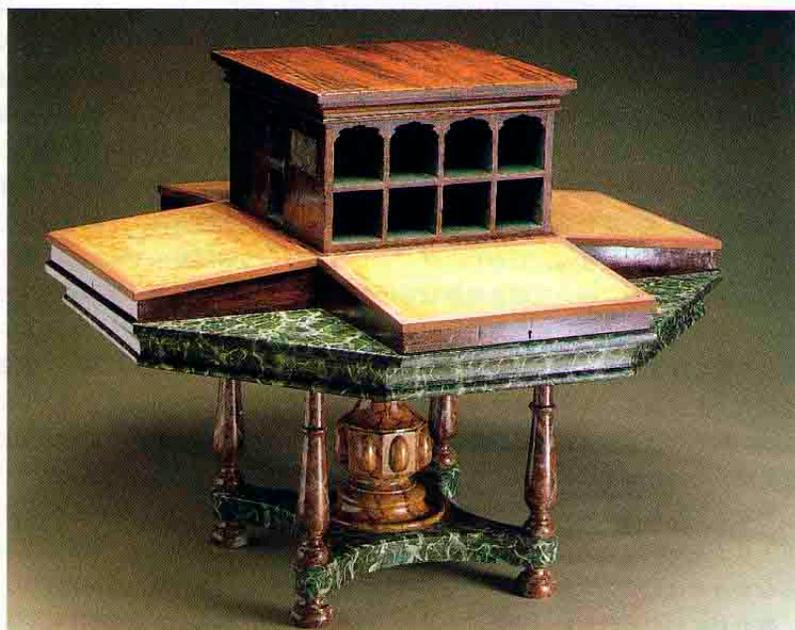
やがて出発の時が来て、宣教師たちは出て行きました。たとえわずかでも東部へ向かって進もうと考えたからです。ヤング会長も馬車の後ろに乗りました。風邪の不快感を味わったことのある人なら、病人がイリノイ州やインディアナ州の田舎道を馬車に揺られて旅するのが、どれほどつらいことが、

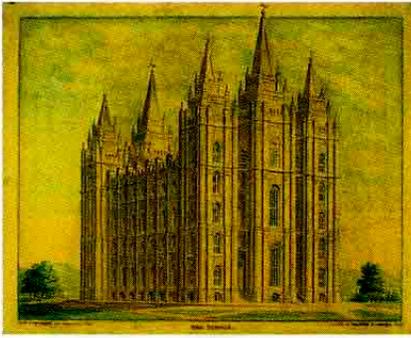


上——平原を横断する際、プリガム・ヤングが用いた外とうと望遠鏡。  
 左——高熱と体調不全の状態から快復しつつあったプリガム・ヤングが、初めてソルトレーク盆地を目にしたのは、ウイルフォード・ウッドラフの馬車の後部からであった。この時彼は、「これで十分だ。まさにこの土地である」と言ったと伝えられている。



上——彫刻が施された金張りのつえの握り。プリガム・ヤングに贈られたもの。右——プリガム・ヤングの書いた設計図に基づいて作られた4面の机。おもに、ヤングや副管長たちが利用した。





上——ソルトレーク神殿の設計用下絵。ウィリアム・ワードが描いたもので、20年以上、ヤング大管長の執務室に飾られていた。右——ビーハイブ・ハウス。ヤング大管長の住居と執務室があった。



容易に想像がつくでしょう。4カ月後、ブリガムはニューヨークに到着しました。ようやくのことで到着したわけですが、しかし、これで苦難が終わったわけではありませんでした。ニューヨーク州のブルックリンで渡し船に乗り込もうとした時、ヤングはどのようなわけか足を踏み外し、鉄製の大きな輪の上に落ちて左肩を脱ぎゅうしてしまっただけです。やがてふたりの兄弟がヤングの体をしっかりと甲板に押しえつけ、パーレー・P・プラットがブリガムのわき腹に足をかけて、その手を強く引っ張りました。ヤング長老は苦しみながらも、右腕で外れた骨を元に戻しましたが、そのまま意識を失ってしまいました。その後も数日間着替えもできない状態が続きました。

普通の人なら、こんなことになるはるか前に、意気消沈して中断してしまっていたかもしれません。しかし、ブリガム・ヤングは、神の王国の建設にかかわることとなると、決して投げ出したりはしませんでした。ヤングは旅を続け、船に乗り込みました。イギリスへの航海中はずっと船酔いに苦しみました。やつれ果ててイギリスに上陸したヤングを見て、いとこのウイラード・リチャーズでさえ、だれだかわからなかったほどでした。

数カ月にわたる苦しい伝道活動を終

えたヤングは、家族の元へ戻りました。ヤングの犠牲は主に喜ばれるものでした。ノーヴーに戻ったヤング長老は、主から次のようなお褒めの言葉を受けました。

「親愛なる兄弟ブリガム・ヤングよ。誠に主かくの如く汝に告ぐ。わが僕、ブリガムよ。汝はもはや今までの如くに、汝の家族と離るるを汝に要求せらるることなし。汝の捧物はわが喜ぶところなればなり。

わが名のために為したる旅行中の汝の働きと、労苦はわが認むるところなり。

されば汝はわが言を広く世間に及ぼすことを為し、今よりこの後いつまでも汝の家族を特に護るべきことを命ず。アーメン。」(教義と聖約126：1-3)

ブリガム・ヤングが予言者の務めを果たすための備えは、このようにして行なわれていったのです。ジョセフ・スミスが殉教した後、ブリガム・ヤングは聖徒たちをグレートソルトレーク盆地へと導きました。1847年、46歳にしてヤングは二代目の大管長として支持されます。以後、彼の指導の下に、末日聖徒は砂漠にさふらんのように花を咲かせました。(イザヤ35：1参照) 彼らは様々な地を探り、荒野に広く定住し、町や村を作り、家や教会堂、神殿を建て、植林し、かんがいし、収穫

してきました。また、産業を興し、商業を始め、交通体系を整えてきました。さらに、子供たちに福音の原則を教え、世界各地に宣教師として送り出してきました。

ブリガム・ヤングは一度ならず、たびたび、この地上のシオンである神の王国の建設のために、その命を文字どおり、祭壇の上に捧げてきました。その目標に比べたら、人生のほかのことは取るに足りないものだったのです。ヤングは真心からその目標の実現を信じました。主は、理想の社会の実現に貢献するよう人々を励まし続けられる人物を選ぼうとしておられました。ですから、王国建設に全身全霊を傾けるヤングは、主にとって理想的な人物だったのです。ヤングはキリストのために完璧に自己を捧げていました。主の使徒として、ヤングは晩年、次のように語っています。

「私は常にシオンを心に描いている。私たちは、天使やエノクの市の人々が来てシオンを築いてくれるのを待っているのではなく、自らの手で確立しなければならない。小麦を植え、家を建て、畑にさくを巡らし、ぶどう園や果樹園を造り、人に恵みをもたらすあらゆるものを生み出すのは私たちである。私たちは、このようにして地上にシオンを建設し、すべての汚れからシオン

を清め、守るのである。

私たちの力の及ぶあらゆるものに、耕す土壤に、建てる家に、そしてすべての所有物に、神聖な影響を及ぼそうではないか。汚れたものを断ち、心に、家に、市に、そして世界中の国々に神のシオンを確立するならば、私たちはこの世に打ち勝つことができるであろう。この地の主人は私たちだからである。そして、とげやいばらに代わって、食用となり地を美しく飾るあらゆる植物が地上に芽を出すであろう。」(「説教集」9:284)

要約すれば、ブリガム・ヤングにとって、都市計画というのは単に町や果樹園を作ることではありませんでした。それは、神のみ使いが住むにふさわしい町を作ることであり、この地上で天国の一部を実現することだったのです。教育、音楽、芸術文化も大切な役割を果たすことになっていました。そしてヤングは、アメリカ合衆国西部におけるシオンが、やがて世界中の民にとって完璧な模範となり、訪れた人々が私たちの模範から益を受ける日が来ることを心から願っていたのです。

ヤングの夢は、多くの面でまだ実現していません。それは、私たちの多くがまだその重要性を十分に理解していないからなのです。現代に生きる私たちに向かって、こう尋ねたくなる人もいることでしょう。「その同じ夢に向かって、ブリガム・ヤングのように努力している男女や若人が、現代の教会にいますか。」それに対する答えは、こうでありたいものです。「いますよ。私たちのワード部にも、私たちの支部にも。」□

## ブリガム・ヤングの年表 1801—1877

年	年齢	出来事
1801	—	6月1日 バーモント州ウィッチングムで誕生。
1815	14	母死去。生計を立てるために働き始める。大工となる。
1824	23	10月5日 ミリアム・ワークスと結婚。
1832	31	バプテスマを受ける。長老の職に聖任される。妻死去。ジョセフ・スミスと初めて会う。合衆国とカナダで短期間の伝道に従事。
1834	32	2月18日 メアリー・アン・エンジェルと結婚。
	33	5月—6月 シオンの陣営で隊長を務める。
1835	33	2月14日 近代で初めて組織された十二使徒定員会の一員に聖任される。
1839—41	38—40	英国で伝道。
1844	43	6月27日 ジョセフ・スミス殉教。 8月8日 十二使徒定員会会長として教会を導く。
1846—47	45—46	聖徒たちのソルトレーク盆地への移住を指揮。
1847	45	1月14日 教義と聖約第136章の啓示を受ける。
	46	7月24日 最初の聖徒の隊と共に、ソルトレーク盆地に入る。 12月27日 大管長として支持される。
1850	49	6月15日 ユタ準州の知事となる。
1853	52	4月6日 ソルトレーク神殿の隅石を据える。
1858	57	6月11日 8年の任期を終えて知事の職から解任。
1867	66	10月6日 完成したソルトレーク・タバナクルで最初の総大会を開催。 11月11日 日曜学校の管理組織を設立。 12月8日 扶助協会を再び組織する。
1869	68	ユタまで鉄道が完成。 11月28日 青年女子のための組織を設立。
1875	74	6月10日 青年男子のための組織を設立。
1877	75	4月6日 合衆国西部における最初の神殿であるセントジョージ神殿を献堂。神権による正しい組織を改めて強調する。 8月29日 ユタ州ソルトレークシティーにて死去。

# 家族の アルバム



十二使徒のウイラード・リチャーズ長老と妻のジェネッタ姉妹は、1845年のある春の朝、息子のヒーバー・ジョンを連れて、イリノイ州ノーヴーにあるリュージャン・フォスターの写真店を訪れました。家族の写真を撮るためです。

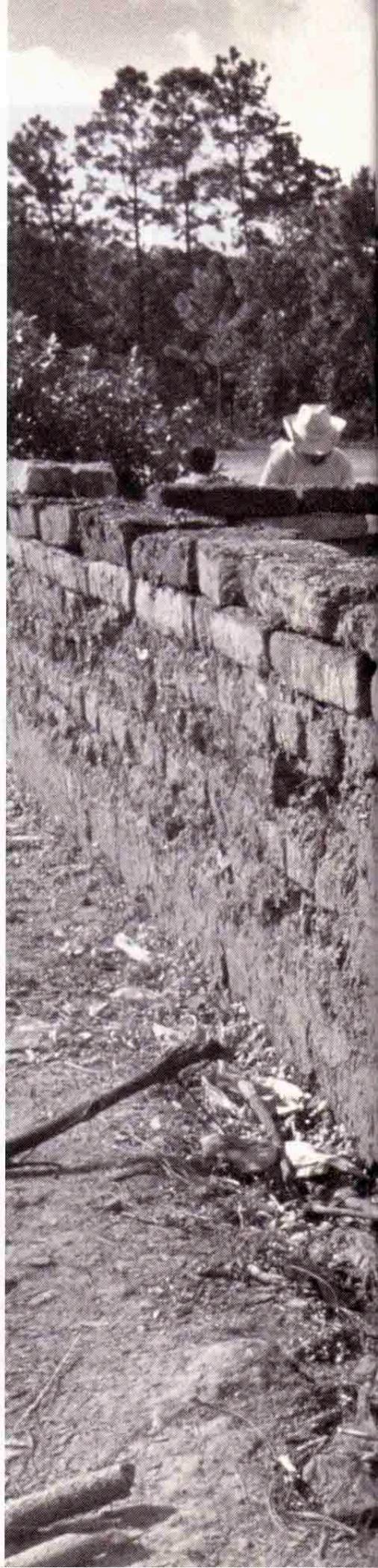
当時、写真は新しく発明されたばかりでした。写真店を訪れるのはリチャーズ家族にとって、わくわくするような冒険だったことでしょう。上掲の家族の写真は、リチャーズ長老とヒーバー・ジョンにとって、はからずも、かけがえのないものになりました。4カ月後にジェネッタ姉妹が急死したからです。

150年以上たった現在でも、この写真はユタ州ソルトレークシティにある教会歴史美術館に貴重な写真のひと

つとして保存されています。

リチャーズ家の写真同様、1枚1枚の写真には何らかの物語が秘められています。たとえば右側の写真は、1989年に、グアテマラの奥地で日干しれんがを用い、自らの手で礼拝堂を建てている教会員を撮影したものです。そこには、信仰と献身、奉仕、そして主への愛がうかがえます。

このように写真は、過去から現在にわたって、末日聖徒の生活における数々の大切な場面を後世に伝えているのです。ここに紹介する何枚かの写真を見るだけでも、人々が福音の中にあって経験を共にすることにより、教会は全世界に広がり、私たちは世界規模の大きな家族として結ばれていることがわかります。



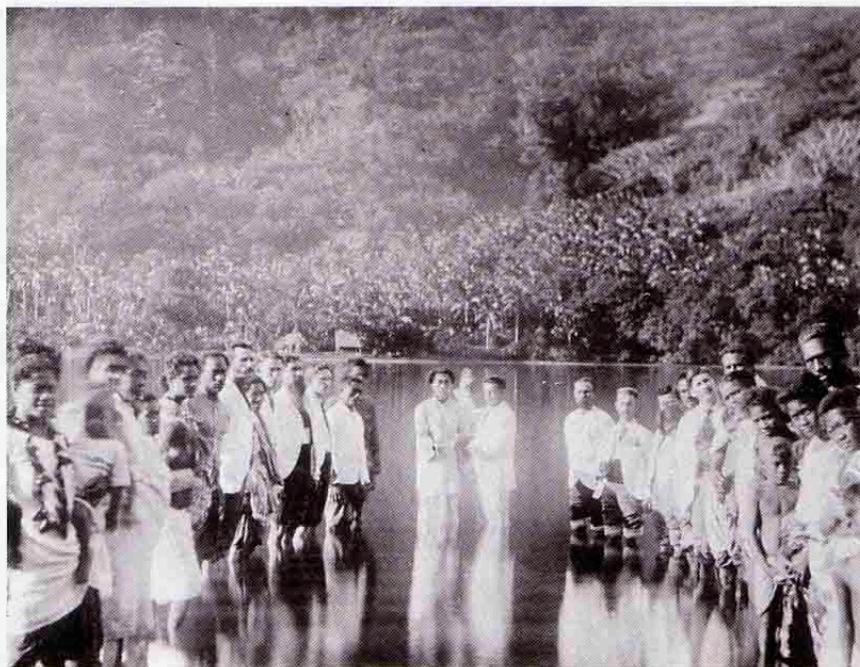
PHOTOGRAPH BY CRAIG DIMOND







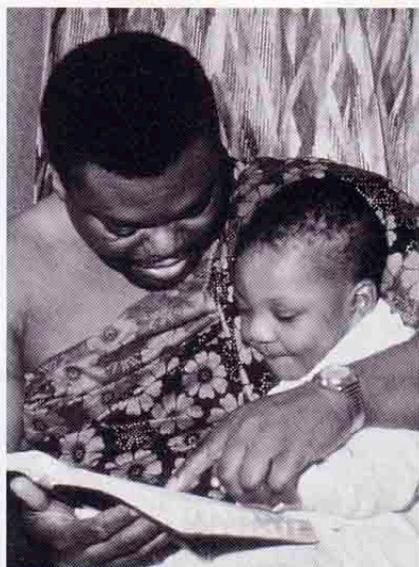
上—1975年、<sup>せいさん</sup>聖餐のパンを裂くプリ  
ガム・ヤング大学学生ワード部の会員。  
このような光景は、世界中のどのワー  
ド部や支部でも目にすることができる。



左—1990年、フランスのサージーで  
伝道する専任宣教師、アルバーテリ  
長老とチャーチ長老。

上—1923年4月6日、シリアのアレ  
ッポで、臨時のフォントを用いてバプ  
テスマを受けるアルメニア人の改宗者。  
この写真の裏には、その日6人のバプ

テスマがあったことが記されている。  
下—世界の様々な場所で、身近にあ  
る川や湖などがしばしば「バプテスマ  
フォント」として利用される。写真は  
1900年にバプテスマを受けたニュージ  
ーランドの改宗者たち。



上——1990年、英国ロンドンにて、息子に聖典を読み聞かせるエノク・クアイ兄弟。クアイ兄弟は以前、ガーナのある部族の族長であった。

右上——末日聖徒は助けを必要としている人々への奉仕を通して、救い主への愛を世界中で表わしている。この家族は、近くに住む未亡人を訪問している。



PHOTOGRAPH BY CRAIG DIMOND



上——1849年、教会で最初の日曜学校が組織された。50年後の1899年、ソルトレークシティの第21ワード部では、様々な言語で日曜学校が開かれた。人々は、デンマーク、スウェーデン、ドイツ、オランダ、ノルウェー、ニュ

ージーランド、英国、スコットランド、アメリカ合衆国など、それぞれの民族衣装で参加した。

右——1990年、旧ソ連のバイボルグ支部で、最初の扶助協会会長に召されたタティアナ・トゥルティーナ姉妹。

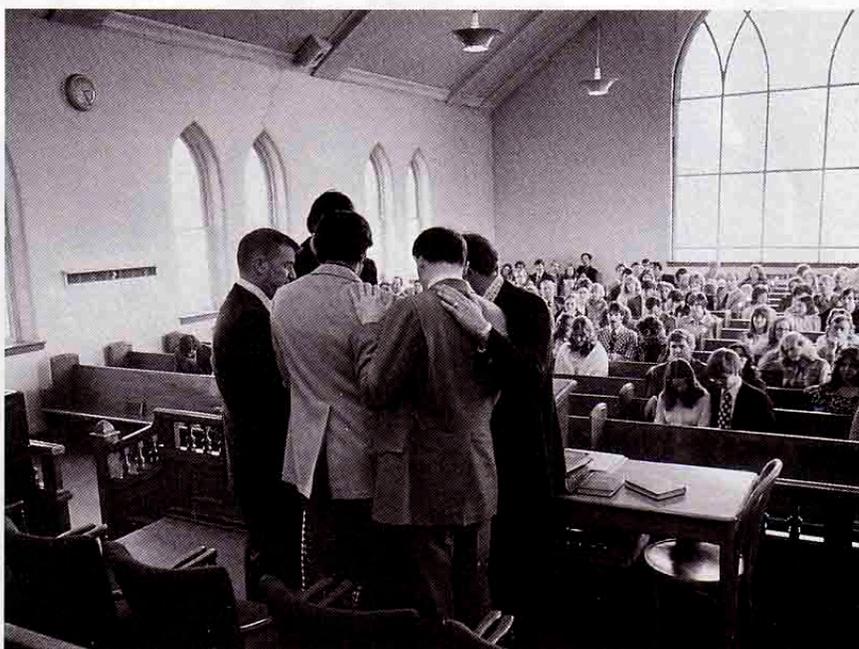
PHOTOGRAPH BY MARK PHILBRICK





PHOTOGRAPH BY ANN LAEMMLER LEWIS

上——ナイジェリア、アクワイボンのエケット支部の会員たち。この写真が撮影された1985年、賃貸の建物を使用して開かれる集會に、30人の会員が集まった。集會はイボ語で行なわれた。下——父親と神権者による子供の祝福。教会における普遍の光景といえる。



PHOTOGRAPH BY DOUG MARTIN

# 日々、主を求め

**慈**しみ深い天父の子供として、私たちは天父の愛に浴しています。にもかかわらず、時折、天父の愛に満ちた導きを感じられないことはないでしょうか。しかし、すべての事柄について主を呼び求めることを学んでいくなら、私たちの信仰はどのような状況にあっても頼れる、本物の強い力となります。そうすれば、日常生活の中で主の導きのみ手を一層はっきりと感じられるようになるでしょう。

アルマ書の中でアミュレクは、天父は私たちの生活のあらゆる面に深い関心を持っておられるが、主の導きは私たちが求めるときにのみ大きな力を及ぼすことを指摘し、こう教えています。

「ねがわくはあなたたちが悔改めを生ずる信仰を起し……神の御名によって祈り始め……

へりくだってたえず神に祈れ。

牧場に居る時は、あなたたちの家畜の群について神に祈れ。

家に居る時はあなたたちの家族全体について朝も昼も晩も神に祈れ。

あなたたちの敵の力を防ぐことができるように神に祈れ。

あなたたちの田畑の収穫が豊であるよう、その作物について神に祈れ。

牧場にあるあなたたちの家畜がふえるように神に祈れ。

こればかりではない、あなたたちが一人で部屋に居るときも、秘密の所に居るときも、また野に居るときも心にあることをうち明けて祈れ。」(アルマ 34:17, 19-22, 24-26)

より強く主の助けを求める必要があ



ILLUSTRATED BY LORI ANDERSON WING

るのは、どのような場所や状況にあるときでしょうか。

## 「道を示してください」

何年も前のことです。ある末日聖徒の少女が家族の牧場から離れた岩だらけの荒野で道に迷ってしまいました。怖くなって途方に暮れた少女はすぐに助けを求める必要があると感じ、目を閉じて熱心に祈りました。「天のお父様、家に帰る道を示してください。」

祈りの言葉が口から出るや否や、あたかも両肩に手が置かれ、道案内をされているかのように感じました。このような導きを受けながら、彼女は近くの小さな谷へと戻り始めました。主に導かれているという強い気持ちは、家にたどり着き、ドアの取っ手を回す瞬間までずっと続きました。

この経験を通して彼女は生涯揺らぐことのない信仰の基礎を築くことができました。彼女はこのように語っています。「すべての人々、特に霊的な意

味で道に迷っている人々が、天父の愛を知ることができたら、と思います。」

天父が祈りを聞き、日常生活の小さな事柄に至るまで導いてくださると証できるような個人的な経験が、あなたにはあるでしょうか。

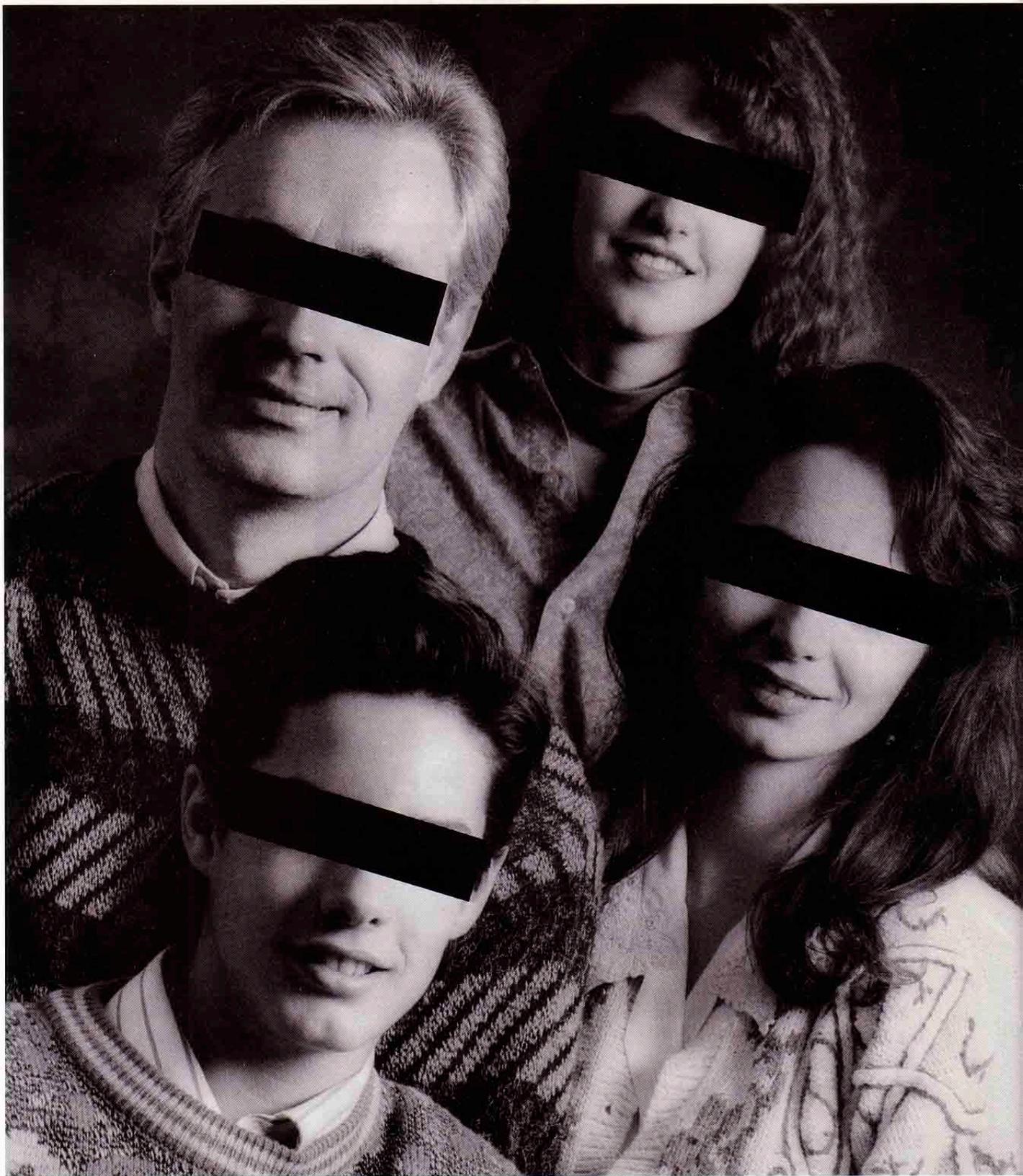
## ドアを開けて主を招き入れる

「見よ、わたしは戸の外に立って、たたいている。だれでもわたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしはその中にはい……るであろう。」(黙示3:20)この聖句を描いた有名な絵を見ると、ドアの取っ手は私たちの側にしかついていません。主はいつでも入って来られるように立っておられますが、主を招き入れるように私たちに強制してはおられないのです。

祈りを通して神に心を向けるとは、ドアを開け、私たちの生活の中に信仰の力を招き入れるように自分自身を整えることなのです。「されど信仰なくば、汝何事も為し得ざることを忘るなかれ。故に何事も信仰を以て求むべし。」(教義と聖約8:10)

主は私たちの日常生活を見ておられ、いつでも私たちの呼ぶ声にこたえようとしておられます。荒野で道に迷い、おびえていた少女を助けてくださったように、へりくだって主に祈り求めるならば、主は私たちにみもとへ帰る道を示してくださいのです。

主の導きを求めながら生活するとき、主の教えに従う力はどのような形で与えられるでしょうか。□



PHOTOGRAPH BY STEVE BUNDERSON

ほほえみの裏では、虐待を受けたことによる恐れや罪悪感に苦しみ、  
耐え難い重荷を負っている人がいます。  
それがあなた自身であれ、あなたの知っているほかのだれかであれ、  
希望、平安、癒<sup>いや</sup>しの祝福にあずかることは可能です。

# 打ち明けられない悩み

リーサ・A・ジョンソン

アンドリア\*に会った人はだれでも、彼女を好きにならずにはいられません。温かく気さくで愉快的な女の子ですし、人を褒めて良い気持ちにさせるのが上手だからです。

でも、アンドリアがこれまでずっとそんな女の子だったかという、そうではありません。

だれにも打ち明けられない、暗く悲惨な秘密を抱えて歩んでいた時期が、長い間あったのです。涙をたくさん流しました。落ち込むこともよくありました。人から遠ざかり、友達もできませんでした。自信がなく、学校でもほかでも、人に抜きでるといことができませんでした。アンドリアは幼い時に性的虐待を受けたのです。

「恐ろしい罪を犯してしまった、と思ったのです。」アンドリアはそう語ってくれました。「口にするのもおぞましくて、だれにも話せないと思ったのです。自己嫌悪に陥り、自分には生きる値打ちもないと感じました。でもある日、とても理解のある監督が、それは私の過ちでもないし、主も変わることなく私を愛しておられ、問題解決のための援助が得られると教えてくれたのです。」

専門的かつ霊的なカウンセリングを含め、いろいろな援助を受けたおかげ

で、アンドリアは少しずつあの忌まわしい過去の経験を葬り、心の傷を癒し、情緒的、霊的な健康を取り戻しつつあります。

## ひとりではない

残念ながら、アンドリアのようなケースは珍しくはありません。若い女性・男性を含め驚くほど大勢の人たちが虐待の犠牲者になっているとの報告が、毎日のように寄せられているからです。虐待の対象者は、ある決まったタイプや社会層の人々に限られるわけではありません。これまでの報告によれば、人種・宗教・職業・収入のレベル・教育的背景などの違いにかかわらず、対象者はあらゆる人々に及んでいるのです。

虐待は、末日聖徒の家庭にも起こるのでしょうか。悲しいことに、実は教会内部でも起きています。教会本部の指導者たちの元に、虐待を受けた会員からの手紙が数多く届けられています。

性的虐待とは、そもそも何を指すのでしょうか。定義によれば児童に対する性的虐待とは、「ひとりの子供と、力を持ち信頼され支配する立場にある大人または同じような立場にある別の子供との間で行なわれる、あらゆる形の性的刺激行為」を含むとあります。（「児童虐待——宗務指導者のために」〔教会パンフレット〕1985年版、p. 2）

「おそらく〔児童虐待の〕問題は、

これまでも存在していたのでしょうか」と、ゴードン・B・ヒンクレー第一副管長は語ります。「今ほど問題視されていなかったのです。この恐ろしい罪悪に対して大きな反対の声が上げられているのは喜ばしいことです。この罪悪は私たちの周りにも非常に多く見受けられます。父親の皆さん、子供を虐待すれば、必ず神の怒りを招くことを忘れないでください。近親相姦の罪を犯した人は、だれであっても神権を受けることはできません。教会員としての資格を持つことも認められません。然るべき措置が取られることとなります。殴打、あるいはほかの方法で子供を虐待する人は、すべての者の偉大な裁き主に対して申し開きをしなければならなくなります。」（『天父に喜ばれるために』「聖徒の道」1985年7月号、pp. 54—55）

教会員から寄せられた手紙の中には、性的虐待がどれほどひどいものかを記したものがありません。15歳になるリンディー\*は、こう書いています。「ベビーシットングをしていた家の両親が帰宅した時、私としては奥さんに家まで送ってくれるように頼むつもりでした。でもご主人が、どうしても自分の運転で、と譲らないのです。私はその時すぐに、問題に巻き込まれることがわかりました。帰宅途中の車の中で、この男性は私にいたずらをしようとしたのです。どんなにやめさせようとし

\*のある名前は仮名です。

ても無駄でした。」

16歳のティファニー\*は、別の経験を次のように記しています。「私は、5歳ぐらいの時のことを特に鮮明に覚えています。兄や姉たちと一緒に、祖父の家へ泊まりに行ったのです。……私は祖父に、おなか痛いと言いました。すると、祖父は私にまくらを取ってくるように、そして自分のひざの上に乗るようにと言いました。それから彼のいたずらが始まったのです。」

25歳のデビッド\*は、男の子も犠牲者になると指摘することが大切だと感じています。「私にも性的虐待で苦しんだ経験がありました。加害者は私のベビーシッターで、私がまだ小さいころでした。私には彼女が何をしているのかわかりませんでした。数年後、何をされたかがわかった時、胸がムカムカしました。恐ろしい気持ちを感じたのです。」

この「恐ろしい」気持ちは、虐待を受けた人のほとんどが経験します。この気持ちの処理は、回復過程の中でも最も大切な段階のひとつです。

### 「罪は問われない」

大管長会は、この問題に関して、次のような方針を公式に認めています。「<sup>ごうかん</sup>強姦あるいは性的<sup>りようじよく</sup>陵辱の被害者の多くは、精神的に深い痛手を負い、不必要な罪悪感に苦しんでいます。教会役員はこのような問題を取り扱う場合、極めて慎重に、また思いやりをもって対処しなければなりません。そして、彼らは邪悪な行為の犠牲者であって、罪はないということを諭して励ましを与え、被害者が罪悪感を克服して対人関係における信頼と自尊心とを再び取

り戻せるように援助してください。

ただし、相手から攻撃をしかけられた場合でも、性的関係を持つことに進んで合意した成人は、当然のことながら、その行為に対する責任を求められます。また相手との性的関係に至る原因を意識的に作った人も、その後の行為に対して責任を求められます。しかし、性的関係を暴力によって余儀なくされたことが確実な人は、被害者であり、いかなる性的な罪も問われません。……

同様に、性的陵辱を受けた子供の場合も、その性的行為の重大性を理解する責任を求め得る年齢に達していなければ、罪に問われることはありません。また、子供側の明白な同意に基づく行為であっても、子供が加害者に対して極めて従属的な立場にある場合は、その同意を無効とするか、子供への道徳的な<sup>もんせき</sup>問責を緩める必要があります。」(教会幹部、地区代表、そのほかの神権指導者への手紙、1985年2月7日付)

### 援助を受ける

虐待の被害者は、自分は悪くないということを知る必要があります。また、助けが絶対に必要だということを知る必要があります。そして、<sup>しんせき</sup>親戚やカウンセラー、教師、監督など信頼を置いている親しい人に、すぐ打ち明ける必要があります。虐待されたことを黙っているべきではないのです。

虐待されたことを報告するのがむずかしいのには、実に様々な原因があります。被害者が虐待の報告をすれば、本人または本人の家族に危害を与える<sup>あやむ</sup>と加害者が脅している場合がよくあり

ます。そのような脅しは、何らかの過ちをその人物が犯しているという明確な合図ですから、すぐにほかの人に話さなければなりません。加害者には自分が悪いことをしているという自覚があり、だれにもそれを知られたくないと思っています。

一方、被害者は、もし脅迫されていることを報告すれば、援助と保護が受けられるのです。

犠牲者の多くが、虐待について話すのをためらう理由がほかにもあります。報告によって家族がバラバラに崩壊するのではないかと恐れるからです。必ずしもそうなるとは限りません。問題が極端に大きければ国の行政機関の力で、加害者を家庭から追い払うこともできます。個人や家族の問題を解決してくれるカウンセラーの力を借りることもできます。カウンセラーの目的は家庭を破壊することではなく、家庭を築くことです。犠牲者は、監督や学校のカウンセラー、<sup>しんせき</sup>信頼できるほかの大人の所に足を運んだり、この方面でのカウセリングを専門とする地域の援助プログラムに助けを求めたりすることができます。費用がないからといって、報告をあきらめてはなりません。必要な助けを受けるために、いろいろな援助プログラムを利用できるでしょう。専門のカウンセラーがそのようなプログラムについて教えてくれます。(訳注——日本では地方自治体の児童相談所などが適切な援助を与えてくれます) さらに犠牲者は、報告によって教会での家族の地位や評判が台なしになってしまうのではないかと恐れていることもよくあります。しかし、加害者に対しては何らかの措置を講じなければなりません。加害者を悔い改めさせ、

さらに虐待を繰り返させないためです。「教会宗紀の目的は以下のとおりである。(1) 背罪者を救う。(2) 罪のない人々を保護する。(3) 教会の……高潔さ……を守る。」(「教会指導総合手引き」p. 10-1)

虐待についての報告は、男性の場合、特にむずかしいかもしれません。男性は力があり、どんな状況の中でも自分を守れなければならない、という社会の風潮があるからです。自分が犠牲者であることを認めたら、自分の男らしさを疑われるのではないかと恐れます。

犠牲者からの虐待の報告を妨げる理由は、ほかにもあります。自分の身近な人の犯しているぞっとするような罪を認めるのはむずかしいものです。そのため犠牲者の多くが自分を責めるようになります。虐待について報告せずに、自分は当然の報いを受けたのだと考えてしまうのです。また、ひとたび虐待の事実が報告されると、自分は不潔で、愛される資格がないと人から思われるのではないかと考えるのです。犠牲者の中には犯罪の事実さえ理解できない人もいます。加害者が、そういう関係を自然で正常だと、犠牲者に信じ込ませるからです。

虐待の報告にはこのようにいろいろな困難がついてまわりますが、それにもかかわらず、報告はきわめて大切です。虐待の関係者全員が助けを得る、という点がとても大切なのです。犠牲者が問題を処理するときに助けを受けなければ、その結果はありとあらゆる醜悪な形でそこかしこに姿を表わすでしょう。虐待は、必ずというわけではありませんが、非行、うつ病、不特定多数の異性間交渉、自閉症、同年代グループとの交際不能、信頼感の欠如、

将来の結婚関係での問題などの原因になることがあります。問題を放置しておけば、今度は犠牲者が自分自身の子供を虐待する、という結果を招くことさえあります。

「9カ月間、私は地域のあるグループに属していましたが、そこに10代の女の子に性的いたづらをする指導者がいたのです」と語るのはシャロン\*です。「私も犠牲者のひとりです。彼がどんなことをしたのか、詳しいことは警察の報告の中に記されています。カウンセリングで、私は自分が受けた行為をいつまでも覚えておく必要はない、とわかりました。」

### 立ち直る

虐待を受けた事実をひとたび認めた犠牲者は、危機に適應する段階を乗り越えなければなりません。多くの犠牲者がその段階の途中で行き詰まってしまいます。こうしたつまづきは本人の対人関係を観察するとわかります。立ち直るには助けが必要な場合がよくあります。

最初に来るのは衝撃です。それは無感覚の状態です。心に痛手を与えたその状況があまりにも恐ろしすぎて、理解できないか、受け入れられずにそうなるのです。

次に来るのが否定です。犠牲者はこう考えます。「信じられない。こんなことが起こるはずがない。なぜ私が。どうして家族が。」

その後には怒り、激高、嫌悪感と続きます。「何てことをしたんだろう」と犠牲者は考えます。「どうしてこんなに恐ろしいことが私に起こったのだろう。こんなに残酷なことができる人な

んでだれもいない。」

そして、約束や取り引きを始めます。「こんなことがもう二度と起こらなければ、きっと忘れることができる」とか、「もっと正しい人になれば、祝福を受けてこんなことは二度と起こらず、全部忘れられるだろう。」

否定しても役に立たないことがわかると、今度は憂うつな気持ちに襲われます。「もう清い状態には戻れない」という間違った考えを犠牲者は持ちます。「自分は価値のないどうしようもない人間だ」と考えるのです。

もし何らかの援助が得られれば、次に来るのは受容でしょう。犠牲者はこう考えます。「この傷はとても深い。でも、人生にはいつも明日がある。これだけのために、永遠に自分を駄目にする必要はない。」

最後の段階は適應です。虐待に対して正しい見方ができるようになり、自信や自尊心もよみがえってきます。虐待は過去の出来事となり、犠牲者はその出来事にとらわれなくなります。

こうした一つ一つの段階を経て、アンドリアの人生は幸福で、より充実したものになりました。性的虐待を受けたほかの人たちも、彼女と同じように、回復に向かって歩き出すことができます。彼らにとって大切なのは、彼らには虐待を拒否する権利があり、虐待を受けた場合は助けが必要だと理解することです。自分に罪はなく、汚れもなく、純潔という点でだれにも劣らないことを知る必要があるのです。何にもまして、天父が変わることなく彼らを愛しておられ、彼らに大きな期待を寄せておられ、立ち直るための方法を与えてくださることを知る必要があるのです。□



# 聖なる地にて

グレゴリー・エンシナ・ピリコフ

チリ・サンティアゴ神殿の中庭にたずんだ私は、少年のころ、ちょうどこの場所にあったカトリック教会の学校に通っていたことを思い出していました。1970年の春、司祭から、学校をモルモン教会に売ることになったという発表がありました。「チリ人の皆さんは、宗教といえばカトリック教会しか思い浮かべないでしょう。」

「もちろん。ほかに何があるというんだらう。」私はそう思ったものです。

司祭は続けて「末日聖徒イエス・キリスト教会についてのレポートを提出するように」と言いました。

末日聖徒の伝道本部が家のすぐ近くにあったので、レポートを書くのに必要な情報を求めて、私は本部を訪れました。家に帰ると、教会を紹介した美しい小冊子と、モルモン経に目を通しました。モルモン経の最初のページには、モロナイの約束が記されていました。

「またこの記録を受ける時、それが真実なものかどうかをキリストの御名によって永遠の父なる神に問え。もし誠心誠意でその上キリストを信じながら問うならば、神は聖霊の力によってこの記録が確なものであることをあなたたちに示したもうにちがいない。

そして聖霊の力によって一切の事の

真実であるかどうかをあなたたちに解る。」(モロナイ10：4-5)

この約束を読んだ時、この言葉は真実で、モルモン経は真実の書物であるというみたまの証を感じました。しかし当時私は15歳で、真剣に宗教について考えるには若すぎました。そのため、この気持ちに対し、具体的な行動は何も取らないことになりました。それでも関心は募る一方で、モルモンに関する私のレポートは、クラスで一番良い評価を受けました。

さらに、ある宗教の授業に出て以来、私は神の属性について深く考え始めました。そして、靈感によって御父と御子と聖霊は別々のお方で、目的においてひとつなのだ和理解するようになりました。この新たな知識を大切に保つたことが、後に主の真の教会をはっきりと知るうえで役立ちました。

主の教会についてははっきりと知ったのは、それから何年か後のことで、家族でアメリカに移り、私がカリフォルニア大学に通っていた時でした。同じ学生寮にいたランディーという友人が、モルモン経を私にくれたのですが、長い間、聞くこともなく私の部屋で眠らせていました。ランディーとはいろいろなことで意見が合いませんでしたが、教会のこととなると、彼の言っている

ことは真実だというみたまのささやきを感じました。

クリスマス休暇で帰省する時、私は飛行機の中で読もうと、かばんいっぱいの本を持っていくことにしました。

本を詰めている時に、モルモン経が目にとまりました。ほかの本を読み終わったら読もうと思い、最後にモルモン経をかばんに入れました。しかし最後に入れた本は、飛行機の中で最初に出て来ることとなります。するとたちまち、この本を読まなければ、という思いにかられました。昼夜をおかず読み続けた私は、4日間でモルモン経を読み終えました。祈りの気持ちで読み進めるにつれ、これは真実の書物であるとわかり、自分が発見したことのすばらしさに驚嘆しました。

カリフォルニアの大学に戻るとすぐ、ランディーにモルモン経に対する私の確信を伝え、バプテスマを受けたいと話しました。彼は感激していました。私たちは宣教師と連絡を取り、間もなく私はバプテスマを受けました。

ひとりの生徒として宗教の授業に出ていたあの時の私は、その同じ場所に建つ主の宮居、チリ・サンティアゴ神殿に参入する日が来るなど考えてもみませんでした。□

# フィジー

## 信仰の島々

「天国のような」とは、フィジーの美しさを描写するのによく使われる言葉です。  
しかし、教会員にとっては福音がその自然美に霊的な美しさを加え、  
この地上のパラダイスでの生活をよりすばらしいものにしてれています。

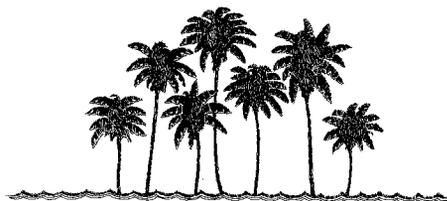
シャーリーン・ミーク・サンダース

かつて教会の太平洋地域会長会のひとりであったグレン・L・ラッド長老はこう言います。「神が一番ご機嫌の良い日にフィジーを造られた。」フィジー諸島最大の島ビティレブ島の端から端まで車を走らせれば、その言葉が実感できます。熱帯雨林の樹木や整然と並ぶサトウキビ畑の上にそそり立つ火山の峰々。ヤシの木立ちと砂浜が続き、その先に明るく緑がかった青色に輝く海が広がっています。また、様々な緑の色合いを醸し出す木の

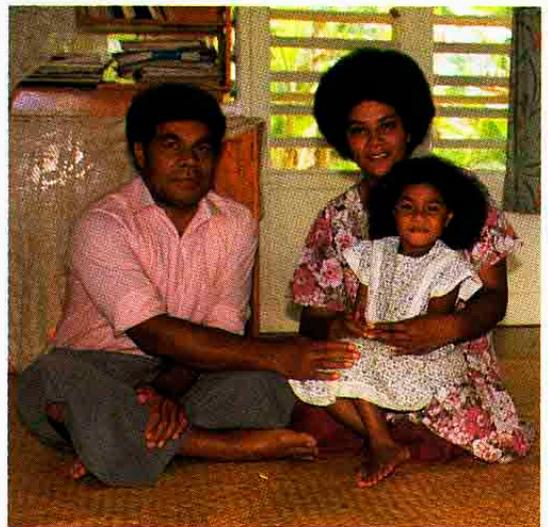
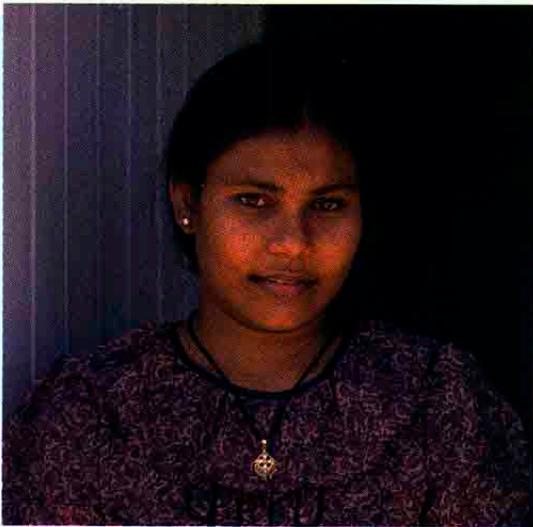
葉の間からは、花や木の実がふんだんに顔をのぞかせています。

パラダイスのようなこの国でも、生活がすべて牧歌的というわけではありません。フィジーの自然美の裏では発展途上の国として、国民は経済的、政治的、社会的な様々な課題に直面し、その発展に伴う成長の痛みとも戦っているのです。しかし、フィジーにはイエス・キリストの福音が生きる力の源となっている人たちがいます。

フィジー・スバステキ部大会でのアカニシ・ロシ姉妹と  
娘のトゥボウトゥア・バラビラちゃん。  
約7,000人の末日聖徒がこの島国に住んでいる。







彼らにとって福音の教えを受け入れ、その原則を実践することは、試練と戦う力や心の平安を得て、来るべきより良き日を待ち望む希望を得ることなのです。

フィジー共和国はニュージーランドにあるオークランドの北約1,700キロに位置し、300以上の島々から成っています。そのうちの約100の島々に人は住んでいるものの、国の人口の大部分は13の島に集中しています。

末日聖徒イエス・キリスト教会がフィジーで紹介されたのは、メレ・ピア・アシュレー姉妹が子供たちとトンガから移住してきた1924年のことでした。初期にはサモアからも数人の教会員が移住してきました。けれども、14人の末日聖徒によって正式に支部が組織されたのは、1954年9月5日でした。当時は首都スバに借りた会場で集会を開いていました。この小さな始まりから39年を経た現在、教会は6,600人の会員と、6つのワード部を有するひとつのステーク部(1983年に組織)、そして15の支部を有するふたつの地方部を持つまでに成長しました。

### 集会への出席

この国の教会指導者の多くは、会員の抱える最大のチャレンジとして、交通手段とコミュニケーションのむずかしさを挙げます。特にスバ郊外やビティレブ島西部の農村地帯に住む会員にとっては大きな問題です。所得の低いフィジーでは車を買える人はごく限られていて、ほとんどの人はバスを利用します。

1987年後半、無血クーデターで誕生した新政権は、唯一の公的交通手段であるバスの日曜運行を禁止しました。フィジーで主流を占めるキリスト教の教派はどの村にも教会があるため、この措置はあまり問題にはなりません。しかし、末日聖徒の多くは支部やワード部の礼拝堂から遠く離れた所に住んでいるため、この措置の影

響は少なくなかったのです。

ファイ・ウズニバラビ、ピリシ・ウズニバラビ夫妻と6人の子供たちは、毎週ナウソリの礼拝堂までの12キロの道のりを歩いていこうと決心しました。「私たちを見て笑う人はいましたが、車を止めて乗せてくれる人はだれもいませんでした」とウズニバラビ姉妹は言います。「それでもいいのです。家を出る前から、私たちの心は教会に飛んでいっているのですから。」

それから3年たった今、政府は規制を和らげ、年間のある時期には日曜にもバスが運行するようになりました。今では、代替りの交通手段を持たなかった教会員たちがバスで教会に通えるようになりました。しかし不便な運行時刻のために、集会に遅れて来たり、途中で帰らなければならないこともしばしばです。

ワード部や支部によっては、会員たちを教会に送り迎えするのにトラックをチャーターした所もあります。ナディワード部のティモジ・ラトゥ監督はそれも問題の完全な解決にはならなかったと言います。「トラック輸送の費用だけでワード部予算をオーバーしてしまいました。それで今は、個人個人の信仰に頼って教会に来るように励ましています。最初こそ出席率は下がりましたが、今では以前と同じ水準に戻っています。」

交通手段の問題は会員のホームティーチングと家庭訪問にも影響を与えています。また、電話のある家庭が少ないことも、問題を複雑にしています。フィジー・スバステーク部のイノシ・ナガステーク部長はこう語っています。「訪問に出かけるのはむずかしいですが、皆一生懸命努力していますし、よい結果も出てきています。」

タブア支部の扶助協会会長ラージ・クマーリ姉妹は、郊外に住む姉妹たちにはメッセージをタイプで打って郵送するように、家庭訪問教師の姉妹たちに指示しています。支部の神権指導者は何人かの兄弟たちをまとめてあ

左端——シガトカ支部のブリッジマ・ワティ・キャラン姉妹は母国で福音のメッセージを分かち合った地元出身の宣教師のひとり。中——フィジーの美しい花々。スイレンとラン。左——ティモジ・ラトゥ監督と妻のレティラ、一番下の娘アケサ。ラトゥ監督はこう語る。「私たちの誇りのひとつは、福音を宣べ伝えることです。私たちは、教会の会員であることを恥ずべきこととは思っていないからです。」

る村に割り当て、彼らが一緒に行ってその村の教会員全員を一度に訪問できるようにしています。

シガトカ支部では、扶助協会会長のシテリ・バロ姉妹が一番遠くに住む姉妹たちを訪問するために、毎月バスに乗って山奥の村々へ出かけて行きます。朝8時に家を出て、帰るのは正午です。「本当はもっとゆっくり訪問したいのですが、その後はバスがないのです。」

スバでは教会員は比較的近くに住んでいますが、スバステーキ部の扶助協会会長グレース・タイト姉妹もコミュニケーションに関しては同じような悩みを抱えています。そこで彼女は、末日聖徒イエス・キリスト教会が経営する小学校の校長職にあることを活用して、監督たちやワード部扶助協会会長たちへの連絡は、学校に来る彼らの子供たちや近所に住む生徒たちに頼んでいます。

### フィジー系とインド系

1878年、フィジーの英国総督府はサトウキビ産業振興のため労働者として多くのインド人を移住させました。5年たつと、インド人労働者には自費による帰国が認められました。しかし、もう5年フィジーに残る者には、インドへの帰りの渡航費を政府が負担するか、フィジーへの残留を認めることになっていました。労働者の多くは、カースト制のあるインドに戻るよりはフィジーに残って生活する方を選んだのでした。現在では、フィジー人口のほぼ半数がこの時の労働者の子孫です。

インド系フィジー人は祖国の文化を維持してきました。それはフィジー固有の文化とはまったく異なるものです。インド系とフィジー系では、宗教も違えば、習慣も生活様式も違ってきます。このため、両者は互いにほとんど交流のないままに暮らしてきました。教会でこのふたつのグループの人々を融和させることは、会員一人一人に

とって常に、愛を示すときの試しとなってきました。特に、近年の政治問題によって状況はより複雑化しています。1987年の10月、インド系が多数を占める政党から選出されたばかりの新首相に代わって、フィジー軍が政権を掌握したのです。それ以来、両グループ間の緊張は増すばかりです。

教会員たちはこの微妙な状況にどう対応しているのでしょうか。スバステーキ部のナガステーキ部長は次のように言います。「私たちのことを観察している人ならだれでも、よく一致を保っていると言ってくれるでしょう。クーデターの時には、会員たちに教会に政治を持ち込まないよう助言しました。教会に入ったからには、皆兄弟姉妹であると教え続けています。個人的に国の状況を気にかけている人たちも含めて、皆本当にそう信じていると思います。」

ラトゥ監督は、ありがたいことに教会の中では新会員の間にも緊張はあまり感じられないと言います。「それはたぶん、社会的階級、人種、信教、肌の色の違いはあっても、人は皆同じであると福音が教えているからだと思います。集会に集うとき、インド系会員の中にフィジー系の人々を恐れる人たちがいれば、彼らを安心させるように努力しています。」

指導者たちは一致するように会員に教えると同時に、実際の経験を通して学ぶ機会も提供しています。フィジー系もインド系も共に高等評議員会やステーキ部、ワード部の補助組織に、また監督会や神権定員会などに召され、専任宣教師としても肩を並べて奉仕しています。そして、互いへの敬愛の気持ちが育っています。「彼女を愛しています。」フィジー系のバロ姉妹はインド系の第一副会長のブリッジマ・ワティ姉妹についてこう言います。「彼女はとても私を助けてくれます。扶助協会の責任だけでなく、私が司会をしているときには幼い息子の



左——モウシミ・シング姉妹(9歳)はこの写真を撮るひと月前にラキラキ支部でバプテスマを受けた。右——建設業を営むイリソニ・ティリー兄弟は首都スバの近くの

ラミワード部で監督を務めた。下——ラージ・クマーリ姉妹と娘のアマル・ラシカ(左)とブラマール・ラシカはタブア支部の会員である。



面倒も見てくれるのです。」

指導者たちはすべての会員が母国語でレッスンを受けられるように配慮しています。フィジーの公用語は英語ですが、年配の会員や遠隔地に住む会員の中には母国語しか話せない人も多いからです。監督や支部長は聖餐会にヒンドスタン語、フィジー語、英語を話す話者をひとりずつ計画することがよくあります。扶助協会や神権会では、教師は通訳の助けを借りて全員がレッスンに参加できるように配慮しています。そして、ワード部や支部の活動ではフィジー料理とインド料理がテーブルをにぎわします。

このような努力にもかかわらず、両グループ間に表面にはっきりと現われない緊張感が生まれることもあります。しかし、末日聖徒のインド系会員もフィジー系会員も共に、教会の中では外の社会で感じられない心地よさと平等感を共有できると報告しています。

### 文化…習慣

先住民のフィジー人にとっては、部族の習慣が生活の中心になっています。国じゅうに散らばる村々にそれぞれの村のおきてを決める村長がいます。実際、宣教師を新しい地域に送るにも、教会の指導者たちは村長の許可を得るために古い伝統的な式典に参加しなければなりません。

村の中では、人々は教会の協同制度に似た生活をしています。財産のすべてを村長に捧げて、村長が彼らの生活に必要な食物、衣類、住む家を提供するのです。もしだれか村から出て行くことになれば、その人の家族がその財産を引き継ぐことになっています。ラトゥ監督はこう言いました。「つい最近、親戚の子供たちの学費があると家族から知らせがありました。その子たちは私生児

で、父親がいないのです。私は彼らに送金しました。親類に必要が生じたときに助け合うのは、ここでは当然なのです。」

フィジーの伝統では、年上の人から話しかけられなければ口を利いてはならないことになっています。また平民は、族長階級の人には呼ばれなければ近づくこともできません。ほかの村の人との接触到に制限がある場合もあります。「この伝統のために様々な障害を生じることがあるのです」とスバステキ部の高等評議員、アレックス・ローベンダン兄弟は言います。「そんな制限があれば、ひとつの村の家族はほかの村の家族をホームティーチングできないことになるからです。

この障害をなんとか乗り越えて、文化ではなく主のみ名によって人々の元へ行ける日が来ることを願っています。しかし、積極的に変化を起こそうとする人はあまりいません。彼らの気持ちもわかります。だれも問題を起こしたくないのです。」

ウズニバラビ夫妻は文化の障害を乗り越えて結婚しました。ウズニバラビ姉妹はフィジーの族長階級の出身で、兄弟は平民です。ウズニバラビ兄弟はこう言います。「交際期間中、妻は私と社会的階級のどちらかを選ばなければなりません。しかし、彼女にとって、家庭に神権者のいることが一番大切だったのです。」

フィジーに住むインド系の人々にも強い伝統文化があります。多くのインド系の家庭では親は子供がデートすることを禁じます。結婚はお見合いによるのが普通です。女性は結婚すると夫の家族の一員となり、夫の母の家に住むこととなります。そこに住む限り、義父の許可がなければ何もすることができません。夫は父親の許可を必要としないので教会に改宗できたとしても、この習慣のために妻である若い女性たちの改宗が妨げられることがあります。

右——スバシ・ダス監督と妻ローズリン、息子のアミット(左)とアナンド。ダス姉妹は、「神殿に参入できて、主がどれほど多くの祝福を約束されているのかわかることができました。それに比べたら、物質的なものなど取るに足りません」と語る。右端——クリスティン・ブラサード姉妹、バレンシャ・ブラサード姉妹とラグニ・ラタ姉妹は福音に生きることを喜びと感じている。

インド系フィジー人のほとんどはヒンズー教徒です。インド系の教会員の中には、何世代にもわたる信仰を捨てたために家族から絶縁された人もいます。フィジー・スバ伝道部長会のピーター・リー兄弟はこう語ります。「私自身の考えとしては、進歩を妨げない限り、その人の文化を大事にすべきだと思うのです。しかし、もしそれが主のみ業の妨げになるならば、私たちは断固として自分の信じる道を取らなければなりません。そうしなければ私たちは前進できないのです。」

### あふれる愛

フィジーの人々の長所のうち、一番目につくのは人々への愛です。「島の特質だと思います」とアレックス・ローベンダン兄弟は言います。「島の人たちはほかの人に何でもあげてしまって、自分にはほとんど残さないほどです。」

ピーター・リー兄弟もこう説明します。「私たちは隣人を愛し、フェロウシップすることを教えるわけですが、この国の人にとって、これは耳新しい教えではありません。彼らにはなじみ深い教えなのです。」

彼の妻のシリアナも同じ意見です。「それは皆が日ごろ実践していることなのです。たとえばもし余分な食べ物があれば、ためらわずに隣の家にお分けします。」

ナディワード部の扶助協会会長ファウオロ・アカタ姉妹は、いつも末日聖徒の夫と子供たちと一緒に教会に出席しているが、長い間バプテスマを受けようとしなかった姉妹を思い出してこう言います。「ある時、彼女に理由を聞いてみました。すると彼女は白いドレスがないからだと言ったのです。そこで私たちは白い布地を買ってプレゼントしました。その後間もなく、彼女はドレスを作ってバプテスマを受けました。」

ナディでは、トンガ・ヌクアロハ神殿への参入のために聖徒たちが助け合っています。トンガまでの旅費はおよそ450ドルです。フィジーでは気の遠くなるほどの大金で、多くの家族にとっては簡単に貯金できる額ではありません。そこで、会員たちは毎年地域でのディナーや民族文化ショーを主催して資金を作っています。そして、失業などの理由で貯金できない人や家族を何人か選び、毎年8月の神殿訪問に送り出しているのです。

フィジーの聖徒たちの温かい人柄は、会員伝道にも大きな効果を表わしています。ワード部や支部の会員たちが改宗前からの知り合いだった、という例は珍しくありません。バプテスマを受けてから1週間後、ラキラキワード部のセミシ・ラトゥ、セラアナ・ラトゥ夫妻は友人ふたりを宣教師に紹介しました。今では、ラトゥ家族の友人のうち5人がバプテスマを受けています。

スバ・ナシヌワード部のスバシ・ダス監督はこう説明しています。「福音を広めることが比較的楽にできる理由のひとつに、私たちがよく人とつきあうことが挙げられます。町で会った知り合いにあいさつしようと立ち止まれば、5分や10分立ち話をするのは珍しくありません。」

### 地元出身の宣教師たち

同胞へ福音を広めたいという願いは、専任宣教師プログラムにも影響を及ぼしています。現在フィジーで奉仕する105人の専任宣教師のうち、38人は地元フィジー出身の長老と姉妹宣教師で占められています。この国で伝道が始まった初期の時代から、地元出身の宣教師は欠くことのできない戦力でした。1954年の5月に最初のアメリカ人宣教師がこの国に来た時には、入国管理局がふたりにしか国内の滞在を許可しなかったため、地元の宣教師



が伝道活動のほとんどを支えていたのです。人数制限はその後徐々に16人まで引き上げられ、1987年のクーデター後は完全に廃止されました。

今もフィジー人の宣教師はほとんどフィジー国内の伝道部に召されています。(現在数人のインド系の長老たちがインドに召されています)その理由のひとつに言葉の問題があります。ほとんどの人たちは英語を上手に話せないで、フィジー人以外の宣教師には抽象的で霊的な原則を教えるのがむずかしいことがあるのです。その問題を、地元出身の長老や姉妹宣教師が解決してくれます。ライシアサ・ベイコーソ長老はこう話しています。「自国語で福音を教えると、もっと明確に説明できる場合があります。こちらの気持ちをもっと明確に求道者に伝えられますし、それによって彼らがみたまを感じられるように助けることができます。」

ナワール・セン長老はフィジーで伝道ができることを心から喜んでいます。それは、同じフィジー国民が救いに至る知識を受け入れるのを見たいからです。インド系の彼は、インド文化と宗教を理解しているからこそ、福音の原則を用いて、同じインド系の人々の問題の解決に手を貸すことができると気づきました。

「6年ほど前には地元出身の宣教師はたった12人しかいなかったのです」とナガステキ部長は言います。「それが今では38人です。将来はもっと増えるでしょう。改宗第一世代の教会員の子供たちが伝道に出られる年齢に近づいていますし、セミナーの学習を通じて福音の原則の理解を深めつつあるからです。」

同じように大事なことは、宣教師プログラムによって若いフィジー人聖徒たちが貴重な訓練の機会を得ていることです。タマブワード部のジョセフ・ソキア監督はこう語ります。「帰還宣教師は大きな力になっています。伝道後も彼らのほとんどは活発ですし、伝道経験を通し

て証が強められ、指導者としての資質が磨かれて、生涯を通しての伝道の責任に備えられるからです。」

ウズニバラビ夫妻は、伝道の経験が霊的成熟をもたらした、その後の彼らの人生と子供たちの人生に決定的な影響を与えてくれたと言います。「宣教師として働くことができたのは、本当に特別な祝福だったと感じています。この国では離婚が多いのです。伝道に出なかったら、私たちも同じ道を歩んでいたかもしれません。」伝道のおかげで教会の活動へは強い証をもって参加しています。「教会は私たちの生活の中心です」とウズニバラビ兄弟は言います。「教会なしではまったくどうしたらいいかわからないでしょう。」

アレックス・ローベンダン兄弟はこう語ります。「せひ外国で伝道したかったのですが、この国が宣教師を必要としているのはわかっていました。困難なこともありましたが、伝道によってこの地の人々をもっと愛せるようになりました。また、ここフィジーで教会の成長を助けようと、決心することもできました。」

しかし、帰還宣教師の多くはフィジーの外へ出て行きます。ブリガム・ヤング大学ハワイ校へ進学してほかの島出身の末日聖徒と結婚したり、経済的な機会を求めて外国での仕事に就く者も少なくありません。

### 信仰——そして奇跡

フィジーの教会員は謙遜で、神が自分たちの必要を満たしてくださいという強い信仰を持っています。そのような信仰に神がおこたえにならないわけがありません。

インド系の21歳のスニタ・クマーリ姉妹が教会に入りたいと思っていた時、彼女の兄は結婚させることでそれを思いとどまらせようとしてしました。ラキラキ支部の会員たちが断食して祈った結果、結婚は破談になり、スニタ



左——16歳のサンジャニタ・シング姉妹と母デビ・ワンティ・シング姉妹。シング姉妹はバ支部で最初に扶助協会会長を務めた。右——バ支部の会員ジョベサ・ナウサ兄弟はサトウキビ畑で作業させる牛にくびきを掛けている。「私は、一歩一歩福音の中で成長しようと思ってい

ます。それが主が私に望んでおられることだと信じているからです。」下——バイオネ・ソロナイバル長老はパン屋の仕事を辞めてフィジー・ナティ伝道部の専任宣教師として働いている。



はバプテスマを受けることができました。

数カ月後、支部の会員たちはもう一度スニタのために断食して祈ることになりました。今度は彼女の仕事が見つかるようにでした。その4年前に学校を卒業して以来、就職先を探していたのですが、バプテスマを受けた今では働いて「什分の一を納め、貧しい人々を助けたい」と心から願っていたのです。1週間たつと、新しくできた企業の秘書としての仕事が見つかりました。その後、彼女はフィジー・スバ伝道部の宣教師として召され、奉仕しました。

ラウトカに住むジョージ・ダン兄弟と妻のモナが、サトウキビの栽培を志したのは、雨の少ない年でした。6週間も雨が降らず、ダン夫妻も苗を植えるために雇った請負人も、苗が枯れてしまうのではと心配していました。ダン夫妻と子供たちは断食して祈りました。その次の日曜日に教会から帰る途中、請負人に会おうと、彼はこう言ったのでした。「あなたたちは実に恵まれていますよ。苗を生かしておくのに必要なだけの雨がたった今降ったところです。」

その後も、貯水タンクが空になりかけた時にダン家族は一緒に雨を願って祈りました。数日後の夜、ベランダに腰かけていると、空に一片の小さな雲が見えました。「今、雨がたっぷり降ってくれたらいいと思わない？」とダン姉妹が言いました。

「降るさ。」これが夫のジョージの答えでした。

そして実際降ったのです。あらしのおかげでダン家の貯水タンクはあふれんばかりでした。しかし不思議なことに、家の前の道路には雨の跡さえなかったのです。

スバシ・ダス兄弟と妻のローズリン、息子のアミットとアナンドは神殿で結び固めを受けたいと思っていましたが、いつまでたっても必要な金額を貯金できませんでした。ダス兄弟が監督として召された時に、エンダウメ

ントを受けなければならないと強く心に感じました。ひとり分の航空券を買うだけの貯金はあったので、ダス姉妹は夫にひとりで行ってくるように勧めたのですが、彼は首を縦に振らず、「行くときは家族一緒だ。主が道を備えてくださる」と言い張りました。

翌週と翌々週の日曜日の2日間、家族は断食しました。2週間目の終わりにダス兄弟の雇い主が4人分の航空券の代金を貸すと申し出てくれたのです。「神殿参入ほど素晴らしい経験はありません。今では私たちがまず神の王国を求めさえすれば、後は主が面倒を見てくださると証できます」とダス監督は言います。

### 何にも勝る喜び

ビサリはバ郊外の農村地帯です。ジョベサ・ナウサ兄弟はそこで4ヘクタールのサトウキビ畑のある農場を持っています。彼はバ支部のメルキゼデク神権者で、福音の教義クラスの教師をしています。「以前この農場ではかなりのサトウキビを生産していました。250トンから270トンの生産量だったのです。私はそれでも幸せではありませんでした。教会員となった今では、経済的な面で思い煩うことはありません。神が私たちと共にあって、助けてくださると信じているからです。去年は減収でしたが、私は幸せです。」

フィジーじゅうの末日聖徒がナウサ兄弟と同じ思いを抱いています。「家族がこれほど一致したことはありませんでした。」「教会の会員になれて、これほどうれしいことはありません。」「福音によって幸福になりました。」

喜びこそ教会がフィジーの末日聖徒にもたらした大いなる祝福のひとつです。それは永遠に続く喜びです。パラダイスでの生活は、ますますすばらしくなるばかりです。□



# 備えられた霊の人、 ポンチャイ・ ジュントラティップ

デビッド・ミッチェル

**ポ**ーンチャイ・ジュントラティップは注意深く部屋の中へと歩を進め、訪問者がどこにいるかを感じ取ります。彼はほほえみ、合掌し、おじぎをするタイの伝統的な方法であいさつをします。

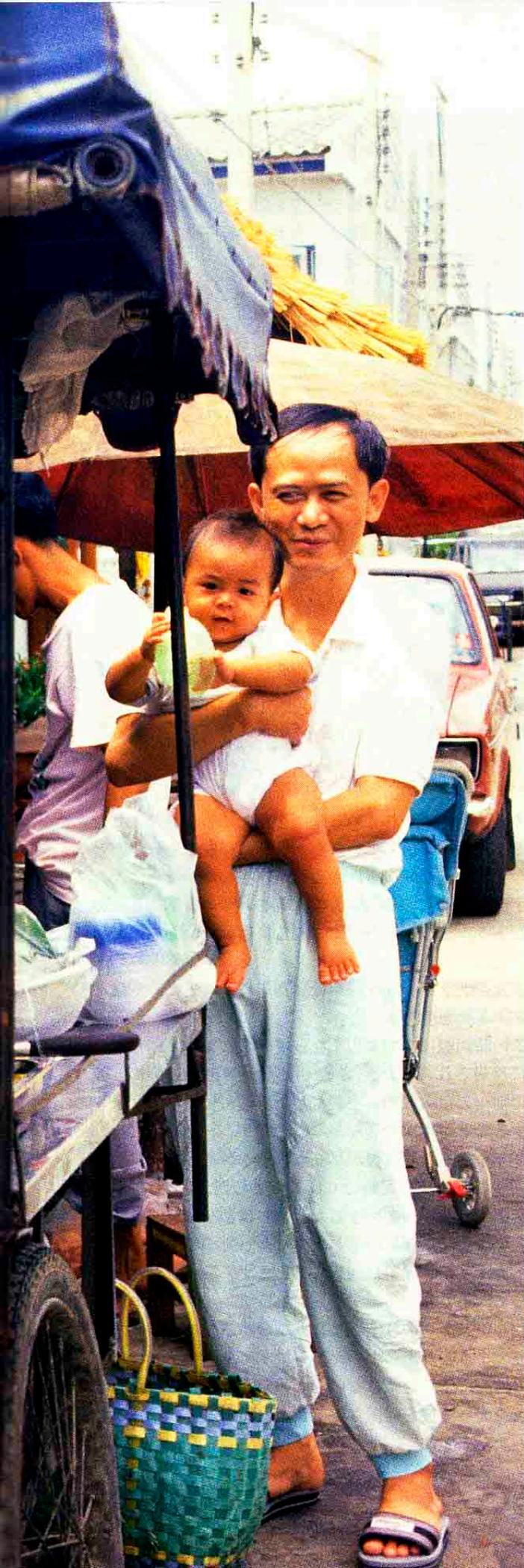
ジュントラティップ兄弟はそう身で、その繊細な顔立ちは46歳よりずっと若く見えます。訪問者は彼から霊的なものを感じます。彼は世のものに惑わされない、心に偽りのない人であると言われていました。生まれ故郷であるタイのバンコクに住むジュントラティップ兄弟は、教会の翻訳者であり、10代で視力を失ったにもかかわらず多くのことを成し遂げてきました。

「右目の視力を失ったのは8歳か9歳のころでしたが、左目しか見えないとわかったのは双眼鏡を使った時でした。その左目の視力も14歳ころ失いました。今は明暗の区別がつくだけです。」

両眼の視力は失いましたが、ジュントラティップ兄弟はみたまによって見る力を養ってきました。

「私が末日聖徒イエス・キリスト教会の宣教師に初めて会ったのは20代の後半でした。彼らはある日、自転車での家のそばを通り、私を見かけたのです。彼らは立ち止

息子のピツポーンを抱いて妻の営む屋台店の横に立つポンチャイ・ジュントラティップ兄弟。左のジュントラティップ姉妹は近くの会社の従業員たちに軽食を売っている。



ポーンチャイ・ジュントラティップ兄弟はコンピュータを使ってセミナーやインスティテュートの生徒用資料をタイ語に訳している。ソルトレークシティから送られてくる英語のカセットテープを聞いて、訳文をコンピュータに入力するのである。右上——息子のピツポーンとジュントラティップ兄弟姉妹。

まり、自己紹介して、教会について聞いたことがあるかと尋ねました。私がいいえと言うと、ジョセフ・スミスの最初の示現について話してくれました。

彼らの話からジョセフ・スミスは良い人で、何も悪いことはしていないことがわかりました。勧められて私はひざまずいて祈り、彼らの話が本当かどうか天父に尋ねました。立ち上がると穏やかな温かい気持ちを全身に感じたのです。」

長老たちは再び来ることと、今度は英語版の点字で書かれたモルモン経とジェームズ・E・タルメージ長老の「信仰箇条の研究」を持って来ることを約束しました。

ポーンチャイは自分はこの時のためにすでに備えられていたと言っています。銀行員である彼の父は、ポーンチャイが9歳の時英語を教え始めました。10歳の時先生について英語を習い始め、後にアメリカにある盲人のための大学が行なう4年制の高校課程の通信講座を受講しました。宣教師と会う少し前に、彼はそのコースを修了し、アメリカの高校の卒業証書を受け取ったところでした。

「その当手を振り返ってみると、すべてが準備されていたことがわかります。宣教師がくれた本を読むことができたばかりか、福音のメッセージを受け入れる霊的な準備ができていました」とジュントラティップ兄弟は語っています。

「私はふたつの宗教の習慣を見ながら成長しました。ほとんどのタイ人がそうであるように私は仏教徒として育てられました。中国人を先祖に持つ私の両親は、中国

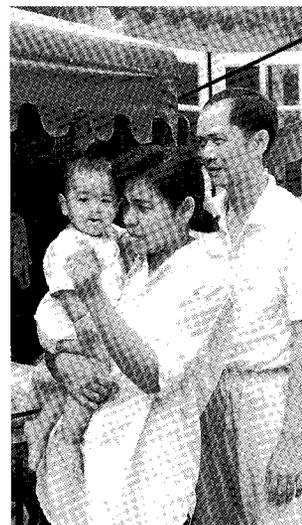
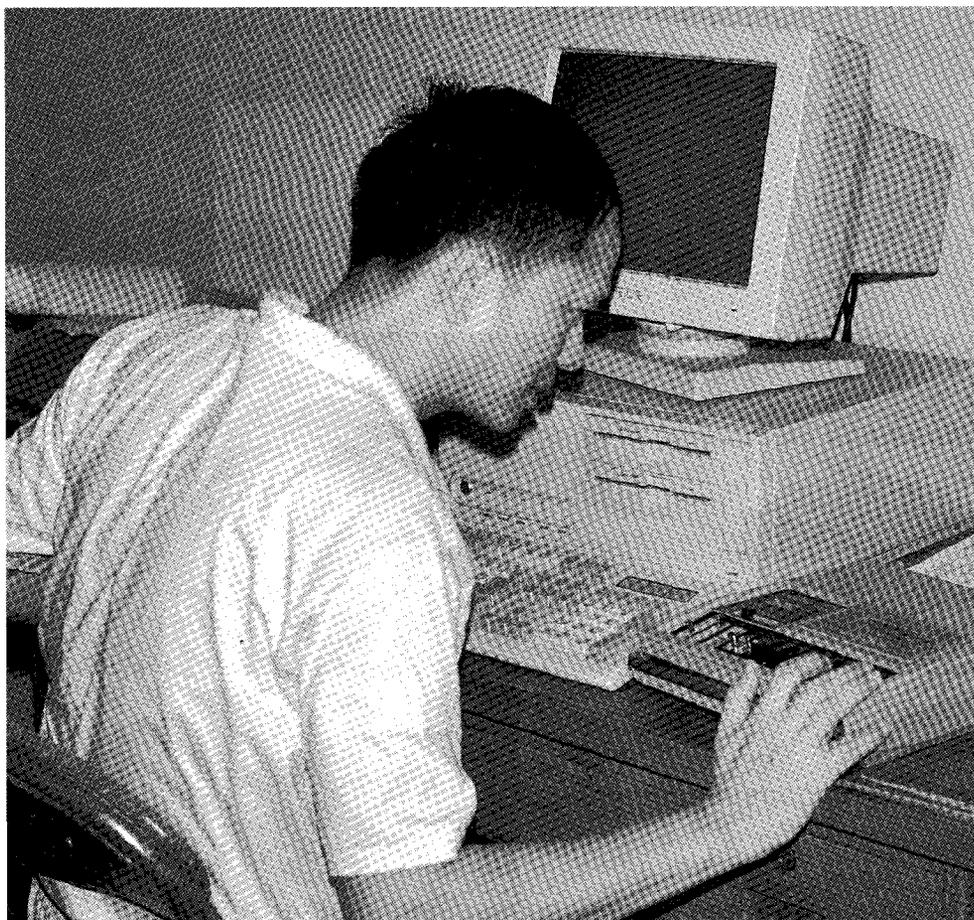
の宗教的な伝統を守っており、新年の祭り、先祖伝来の祭り、新月の祭りなどを行なっていました。

しかし、私はイエス・キリストについて読んだことがあり、ずっと昔の小さいころ『十戒』や『聖衣』といったキリストが描かれている映画を見たことがありました。そして私は神を信じていました。神は存在するはずだと思いました。なぜなら、もし神が存在しないなら、だれが宇宙やそこにある良いもの、美しいものを創造したのでしょうか。全能のお方がおられるに違いないと思っていました。」

ジュントラティップ兄弟は1976年12月6日に、28歳でバプテスマを受けました。

この時両親はすでに亡くなっていましたが、ふたりの弟に反対されました。「ふたりとも大学出の技師で、彼らの唯一の宗教は物質主義でした。彼らには私のしようとするのが理解できなかったのです。」

3年後、ふたりは彼がブリガム・ヤング大学ハワイ校に通うことを決めた時にも反対しました。「弟たちは私が落第すると思っていました。彼らは私を国に連れて帰るという不面目な思いをしなくなかったのです」とジュントラティップ兄弟は回想しています。彼を行かせまいとして、弟たちは母親がジュントラティップ兄弟のために残した遺産を取り上げました。彼が遺産を売って学費に充てようと計画していたからです。弟たちが言うには、その遺産には手をつけずに、彼が大学に失敗したとき、それを売って彼を帰国させる費用に充てるということでした。



しかしジュントラティップ兄弟はなおも計画を押し進め、ブリガム・ヤング大学ハワイ校に入学の手続きを取りました。航空会社に手紙を送り切符を半額にしてほしいと頼んだところ、航空会社は無料の切符を支給して助けてくれました。

ポーンチャイは大学で英文学を勉強し、講義をテープに取り、教科書もテープに入ったものを聞きました。

1983年12月に卒業し、ユタ州プロボのブリガム・ヤング大学に入学し、英文学の修士課程を取りました。「私がハワイでの学業に成功したので、ユタまでの旅費にするために弟たちは遺産を売ったお金を私にくれたのです。多くの時間を勉強に費やしたので、働くことができませんでしたが、幸いにも奨学金を受けることができました。1986年6月に修士号を取り、タイに帰国したのです」とジュントラティップ兄弟は語ります。

タイに戻ってから7カ月間、自宅で生徒たちに教え、その後教会から翻訳の仕事の依頼を受けました。

「私のような盲人に適した仕事が見つかるようにと私はずっと祈っていました。翻訳の仕事はまさにそれでした。私はセミナーとインスティテュートの生徒用資料をタイ語に翻訳しています。」

最初ジュントラティップ兄弟は自分のために英語の原

文を読んでもくれる人を雇いました。彼がタイ語の訳をテープに吹き込み、次いでそのテープから書き取るというやり方でした。タイ語のタイプライターを自分で学んでは、後半のふたつのステップは除かれました。後に彼はタイプライターをコンピュータに代え、これによって校正作業が楽になりました。加えて今では、英語の原文を吹き込んだテープを受け取るようになっていきます。

ジュントラティップ兄弟はブリガム・ヤング大学から戻って2、3年後に、伴侶となるクワンジャイほんりよに会いました。彼女はタイで専任宣教師として伝道しました。

ジュントラティップ夫妻は1990年6月、フィリピンのマニラ神殿でクワンジャイの伝道部長であったフロイド・ホーガン神殿長によって結び固められました。1991年8月には彼らに息子のピツポーンが生まれています。「彼の名前は『祝福師の祝福』という意味です。私たちは彼が成長して母親のような良い宣教師になることを望んでいます」とジュントラティップ兄弟は言います。

彼はまたこうも述べています。「宣教師から福音を学んだ時、彼らの伝える福音のメッセージは真実で、良いものだと感じたことを思い出します。福音に添った生活を送るよう努めたことで、今では福音は真実で、良いものであるとはっきりと知っています。」□



# あなたの伴侶の幸福

メルビン・L・ブルーイット

夫婦間の愛情を壊すものはぐくむのも、それぞれの伴侶が鍵を握っています。少し前の話ですが、私はある美男美女の夫婦をしばらく眺めたことがあります。女性の方の態度から、デートをしているようには見えなかったので夫婦だとわかりました。彼女は、何かささいなことで、ご主人が気の毒なくらいがみがみと小言を言っていました。その言葉と身振りから、ご主人のことをつまらない人だとなじってい

たようでした。私には彼がそのような人には見えませんでした。実際のところ、ふたりとも聡明そうで、暮らしぶりも良く見えました。にもかかわらず、彼女のご主人の言うことなすことに、いちいち文句をつけていたのです。

私はその若い女性の所に行き、こう尋ねてみようかと思いました。「あなたは一体何をしようとしているのですか」と。おそらく彼女は、気に入らないところを指摘すれば、夫が確かに

自分の言うとおりでであると悟って、直ちに自分の望みどおりの人になってくれると考えていたのでしょう。ところが、実際に彼女のしていたことは、彼女を愛せない人を作り上げていただけでした。どれほど彼が強い人間でも、どれほど交際中に彼の愛が燃えていたとしても、あのような扱いを受けていてはその愛もいつかは冷えきってなくなってしまおうでしょう。

こう言う若者もいます。「少しくらい口げんかしたって、ふたりの愛は揺らいだりしませんよ。」確かに傷は治ります。それでもやはり、傷跡は残るのです。それに傷跡だらけになると、愛を育てる余裕などなくなってしまいます。

私たちの心や体の反応は、人が私たちをどう待遇するかによって左右され、形成されていくものです。たとえばあなたが、冷蔵庫の取っ手に触るたびに激しい静電気を受けるとしましょう。この静電気が、来る日も来る日も、数カ月間続くとしたらどうでしょう。あなたはきっとこの冷蔵庫が嫌になるでしょう。だれかが「冷蔵庫」と言っただけでも、ぞっとしてしまうかもしれません。

かつては愛し合っていた夫婦でも、言葉や態度で互いを批判し合っていればこれと同じことが起きるのです。長年にわたるひどい待遇に対して、愛を持ちこたえることなど、はたしてできるのでしょうか。愛とは人を幸せにしてあげたいと思う心ではないのでしょうか。伴侶を傷つけるような批判をする

PHOTOGRAPH BY MATT REIER





PHOTOGRAPH BY STEVE BUNDERSON

人は「あなたが何と思おうと関係ない。あなたのことなんて愛していないのだから」と言っているようなものです。

私の知り合いに、何年も連れ添った夫婦がいます。ふたりとも大学を出た魅力的な人たちです。ところがそのご主人は、奥さんが社交の場で何か意見を述べるたびに、けなしにかかるのです。彼女の自尊心は一体どうなるのでしょうか。彼女には感情などないと思っただけなのでしょうか。彼女は彼の愛がどのようなものだと思うのでしょうか。これから何年かたつうちに、彼女の愛はどう変わるのでしょうか。結婚生活においては、たとえ冗談であっても、

どちらかが相手よりも偉いということはないはずで。

ときどき、私たちは伴侶と意見が合わないことがあると、どちらかのせいにしようとしがちです。そして、ひとたびどちらが悪いかを決めてしまうと、その人は罰を受けるべきだと考え、大抵はしんらつな言葉で懲らしめるのです。しかし、結婚生活で裁きを求めるなら、私たちは愛という祝福を失うでしょう。

自分の伴侶となるような特別な人に出会うと、すばらしい気持ちが芽生えてきます。これは神から与えられるすてきな贈り物です。私たちはこの感情を美しい花として大切に育てることも

できます。すると、この花は何年もの間、新鮮さと美しさを保ち続け、成長していくでしょう。しかし、虐げ、あざけり、ないがしろにすることもできます。そしてやがて、その花はどうしてしおれ、色あせてしまったのかと思う日が来るでしょう。これは花と人の愛のどちらにも言えることなのです。

伴侶を本当に愛するならば、伴侶の幸福を心から気遣い、伴侶の幸福を損なうようなことを言ったりはしないでしょう。そして、口から出る言葉はすべて、伴侶を褒めたたえるやさしいものになるでしょう。このようにして、愛ははぐくまれるのです。

これは私たち自身が選ぶことです。伴侶を攻撃すること、自分の権利や利己心を守り通すこと、間違いを指摘したり、あら探しをしたり、不愉快さをあらわにすること。これらのことに人生を費やすこともできます。もし、こちらを選ぶならば、何年か先にはあなたの伴侶の愛はさびつき、伴侶があなたのひとみをのぞき込んで心を躍らせることも、あなたと一緒にいて穏やかな気持ちになることもなくなるでしょう。

しかしもっと賢い選択もできます。絶えず、心からの愛を伝える言葉を交わせるように自分自身を変えようと努力をすることです。そうすれば、あなたが部屋に入るたびに、喜びの笑みをたたえた伴侶の顔を見ることができるようでしょう。私たちには、結婚生活を通して永遠の愛を築く機会が与えられているのです。さて、あなたはどちらの道を選ぶでしょうか。□

# 教会活動に 積極的でない人々を 助ける方法

**私**は帰還宣教師で、独身です。これまでずっと教会には活発に集ってききました。しかし最近引っ越してからの一時期は、なんとなく教会に居場所をなくしたように感じました。ワード部のメンバーだという所属感が薄くなって、自分のことを気に留めてくれる人がいないように思えたのです。そこでお休み会員の人たちだけでなく、どの教会員にも役立つと思うことを、提案として挙げてみたいと思います。

- 教会員がワード部にあって貢献できるようになるには、まず、愛と関心を感じ

る必要があることを認識してください。寂しくて友達を必要としている人はおおぜいいます。ワード部に来たばかりの人には、自己紹介したり、だれかを紹介したりしてください。どんなことに関心を持っているかなど、その人について知るように努めてください。

- 人を裁かないでください。孤独だ、なじめない、仕事で集会になかなか出られない、気持ちが悪くさめてしまっている、人間関係がむずかしい、道徳的な問題があるなど、教会活動に積極的でない理由は様々なはずです。活動に誘

うのは大事ですが、説教はしないことです。話に耳を傾け、理解するように努めてください。

- いつでも奉仕したいという心を持ちましょう。私が引っ越した時、後の掃除の手伝いをしてくれる人がいたらどれほどありがたかったでしょう。

- 会話の中で証を述べましょう。証は正式な集会だけのものではありません。「証を述べたいと思います」と言って始める必要もありません。自分が信仰を鼓舞された経験を、機会あるごとに話してください。

- 自分にどんな助けができるか知るために、断食と祈りを通してみたまの導きを求めましょう。私の場合、最もすばらしい経験は、心からの祈りの結果としてもたらされました。

- 人を助けるときは、忍耐強くあってください。すぐに目に見える効果が表われないとしても、実りは必ずあります。ときには一生かかるかもしれないのですから。

匿名希望

## 励ましの手紙

励ましの手紙を書くことは、大きな助けになると思います。私の場合、相手の人が活発でなくなった理由などはあまり話題にせず、自分たちにとってその人がどんな助けになっているかを書きます。その人が得意としていることや、その人の良さや才能が皆のために役立っていることを伝えるのです。

そしていつも、天父がその人を愛し、心にかけておられることを伝えるようにしています。彼らは、助けが必要なときに親身に話を聞いてくれる人として、私たちを心に留めるようになるでしょう。

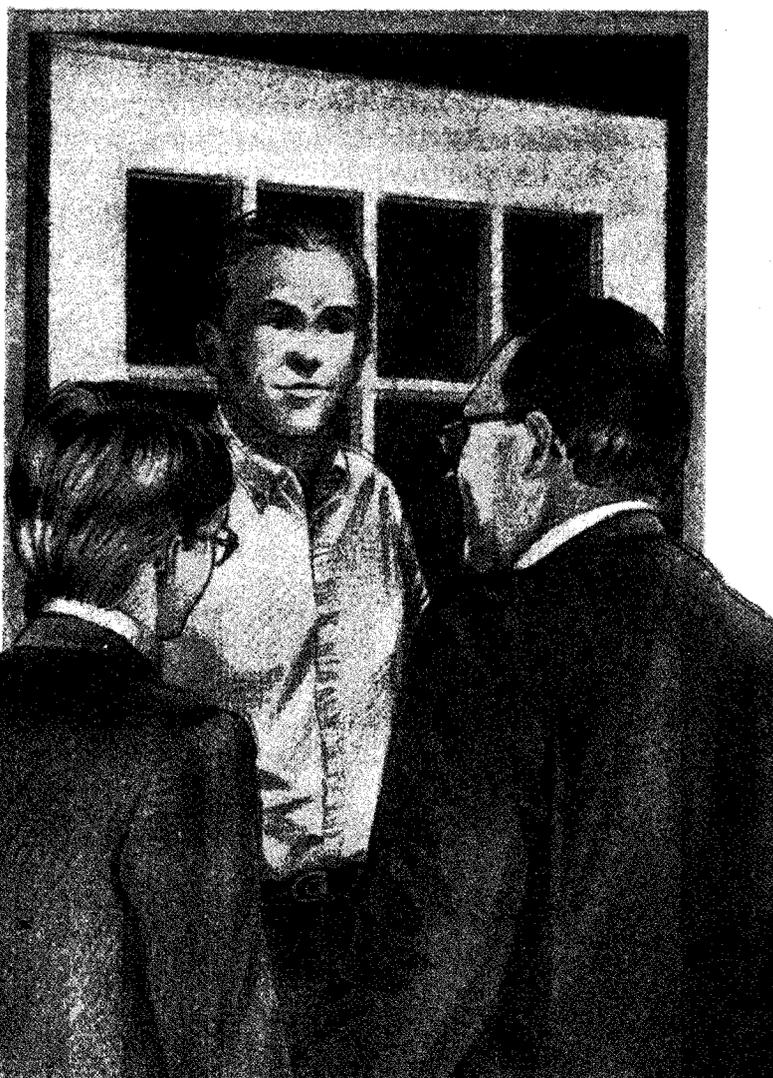
祈るときは、常に、その人についても祈り、どうしたらもっとよく助けられるか、天父に導きを求めるように努めています。

ペンシルベニア州ペンヒルズ  
アンジェラ・アイケンミラー

## 思いやりを示す

すべきこととすべきでないことを、

ILLUSTRATED BY DILLEEN MARSH



次に挙げてみようと思います。

- 電話をする。
  - 思いやりと理解を示す。
  - 愛する。
  - その人が所属するワード部の監督に、助けの必要なことを知らせる。
  - 裁かない。
  - 悔い改めを要求しない。
  - その人のうわさ話をしたり、ほかの人にも、うわさをさせないようにする。
- ミズーリ州オロノゴ  
パトリシア・メイフィールド

### 「わたしの羊を養いなさい」

イエスはペテロに、わたしを愛するか、と3度お尋ねになりました。(ヨハネ21参照)ペテロがそうですと返事をするたびに、イエスは「わたしの羊を養いなさい」とおっしゃっています。

この明快な言葉は、キリストのみ名を引き受けると宣言し、またそう望んでいるすべての人が心に留めるべきものだと思います。人々が一步高い段階に上がれるように手を貸すためには、まず自分が高い段階にいなければなりません。ですから私たちは、愛や奉仕といったキリストのような徳質を伸ばそうと努めなければならないのです。

キリストがされたように、私たちは本人の自由意志を尊重するだけでなく、その人を励ます必要があります。

また、励ますだけにとどまらず、教えを施します。

教えるだけではなく、みたまによって証をします。

みたまによって証するだけでなく、みたまの導きを受けて具体的なチャレンジをします。

チャレンジをするだけでなく、忍耐と愛をもって、引き続き力になります。

私はこれらのことが、お休み会員のために役立つことを知っています。「きょう、み声を聞いたなら、あなたがたの心を、かたくなにはいけない」(ヘブル4:7)という聖句を、私は信じています。

オハイオ州シンシナティ  
ゲーリー・B・ワイズ

### じっくりと話す

ひとりの青年が当地に来て大学に通っていました。母親から、彼が教会に出席していないという電話を2度ももらいました。青年は内気で、住んでいる所から10マイル(約16キロ)離れた集会所までの道がわからなかったのです。私はときどき大学まで彼を車で迎えに行ったり、ある帰還宣教師に依頼して迎えに行ってもらったりしました。ステーク部大会には夫と共に迎えに行きました。

彼は大学で野球をしていたのですが、留年選手(訳注—米俗語。故障からの回復や力を伸ばす目的で学校を1年留年する運動選手)になるよう勧められた時は、気落ちしていました。私は彼に、スポーツより伝道の方が大切だということについて記された教会の本をプレゼントしました。また何度か、時間をかけてじっくりと話しました。やがて彼がクリスマスに帰省した際、うちに電話をかけてきてこう言いました。「どうして電話したと思いますか。当ててみてください。実は伝道の申請書を出したんですよ。」彼はアラスカで伝道し、その間2年間手紙をやり取りしました。今は帰還して、大学の野球チームの花形選手になっています。そしてワード部では若い男性の会長をしています。

この経験からたくさん喜びが得られ、私自身の証も強められました。「わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである。」(マタイ25:40)

アリゾナ州ダグラス  
ベティ・ヒューイシュ

### 目標を定め、専念する

大事なことは、彼らにとって重要な事柄、つまり価値観や人とのきずななどにしっかり目を向けるよう、励ますことです。彼らが目標を定め、それに専念できるよう手助けしてください。教会の活動に積極的でないおもな理由のひとつは、人生で本当に必要なものに心を向けていないということです。自

分が本当に求めているものは何かをはっきりと見定め、それに専念するなら、生活に変化が生じ始め、積極的な毎日を送れるでしょう。

行動を起こす必要があるのは、何より本人です。彼らが、生活を変えて行動する必要があることを理解できるよう手を貸してください。たとえば、祈ったり聖典を勉強したりということを実行しなければ、日々の生活に必要な天父からの霊感を受けられないのです。

ユタ州ウエストバリーシティ  
レックス・テイラー

### 誕生日の電話

監督をしていたころ、私は会員の名前と誕生日を、活発な会員かどうかにかかわらず、手帳に列挙していました。そして誕生日には電話をかけ、助けが必要なことがあればいつでも訪ねたいと思っていることを伝えました。火曜日と木曜日には、副監督や長老定員会会長、大祭司グループリーダーと一緒に、お休み会員を訪問しました。彼らは私のことを覚えていました。それは誕生日に電話をかけていたからです。この電話のおかげで、たいていは訪問した際に家に招き入れてもらえました。こうして私たちのワード部では、お休み会員に対する訪問に力を注いだのです。

このような接触を続けてくうちに、彼らと打ち解けるようになりました。連絡を取り続け、教会に戻るよう励ますこともできました。活発になって、今では神殿に行こうとしている人たちもおり、よい経験を共有できたと思っています。

カリフォルニア州エルケージョン  
H・ブレント・ロス

### まとめ

1. 愛を伝え、友達になる。
2. 裁かず思いやりと理解を示す。
3. 信仰が鼓舞されるような経験を分かち合う。
4. どのように助けるべきか、導きを求めて断食し、祈る。忍耐する。(「チャーチニュース」1992年9月19日付)

## 家族の証

絶望のふちで見いだした  
希望の光

大阪伝道部御坊支部 木下真紀子

**神**様との出会いは、私にとって運命的なものでした。それまでは義父母と3人の子供と共に農業と酪農で生計を立てていく中で、小さな夢ですが、お金をもうけていい車に乗り、いい服を着て、家族仲良く暮らすのが幸せだと思っていました。

しかし4年前、春まだ浅いころ、私は毎日の家事や仕事、子育ての疲れ、家人に対する気疲れなどで心身がともにすり減り、食事ものどを通らず、最後には入院しなければならなくなりました。1カ月半の入院中いろいろと検査をしましたが、特に身体の異常はありませんでした。しかしその後も、自律神経失調症のため、<sup>どろ</sup>動悸がする、血圧が低い、疲れやすいなどの症状が続き、少しも快復しませんでした。「自分の人生は33歳で終わりなのか。何の

ために生きているのだろうか。私は今まで何をしてきたのだろうか。子供に何も残さず、人生に満足感も得ないまま逝くのか。」こう考えては落ち込み、ひたすら押し寄せてくる絶望感の中で苦しんでいました。酪農という休みのない仕事に取り組む夫には余計な心配もかけられず、子供の前では精一杯明るく振る舞ってはいたものの、だれかに胸の内を聞いてほしい、助言してもらいたい、という気持ちでいっぱいでした。

そんな矢先、子供たちが近所の友達に誘われて英会話教室に行き出しました。宣教師のアパートで開かれる無料英会話には、近所の子供たちのほとんどが出席していました。ある日その宣教師たちから、私たちの地区で「お話をするので来てください」と知らせが

ありました。子供たちがいつも英語を教えてもらっていたので、近所の奥さん方と頭数にでもなればと思って、行ってみることにしました。彼らはとても誠実で、純粋で明るく、希望にあふれていました。そんな彼らに私はとても引かれました。特に年輩の西原良男長老のお話は、私の心をとらえました。どうしたらストレスから解放されるだろうかと日夜悩んでいた私の気持ちを、その日初対面の西原長老が知っているはずはないのに、話の中で「ストレスをためない方法は、嫌いな人を好きになることですよ」と言ったのです。その言葉は私の心に強く残りました。

それから数日後、話の続きをもう少し聞きたくなり、教会を訪ねてみることにしました。もうお正月に近いころでした。私は夫の理解を得て、宣教師から福音を学び始めました。宣教師から救いの計画について教えられた時、心を打たれ、安心感がわいてきました。自分の行く先がわかったのです。これで「死んだらどうなるの」という子供たちの質問にも答えられます。精神的にどん底まで落ちていた私は、力強いロープを支えに一步一步はい上がるつもりで宣教師に福音を教えてもらいました。そして1991年1月29日、長男の誕生日にバプテスマを受けることができました。

私は幸せをつかみたい一心でした。福音の知識を得るたびに目を輝かせ、元気にその話をする私の様子を見て、夫は不思議なものを感じるようになってきました。3月17日、ふたりの子供も夫の許しを得てバプテスマを受けました。このころ神様は夫に試練をお与えになりました。夫は、私と子供たちが教会の勉強を始めたので、取り残されたような、心苦しい日々を送っていたようです。

けれども夫は突然同年の4月25日、私へのバースデープレゼントとして、また10年目の結婚記念日に、バプテスマを受けることにしました。私たち家族は、まっすぐで狭い道に入る出発点に立つことができたのです。義父母も次第に私たちのことを理解してくれるようになり、続けて仕事を手伝<sup>て</sup>ってくれる宣教師たちのことをよく褒め、

木下ご家族



「神様のような人」と近所の人たちに話しています。

2年前、不安で車の運転はもちろん、買い物にも行けず、外へ出るのも恐ろしい毎日を送っていましたが、今ではイエス様によって救われ、神様に見守られていることを信じているおかげで、やっと元の生活ができきるようになりました。友達からは、「元気になって顔色が良くなった。落ち着いた感じがする」と言われます。教会に入ってから、人間関係や子育てについての悩みの答えを聖典や「聖徒の道」から得ることができます。また祈り求めるとき天のお父様はこたえてくださいます。私の心の平安は、天のお父様からいただいた一番大切な祝福です。扶助協会は日々の成長を助けてくれます。私たちの地区の扶助協会では、教会員が3人とそのほかに2人が共に、より良い女性になれるよう学べることを感謝しています。

福音を知らなかったころは何を基準にしていかわからず、暗やみの世界を手探りで、この世の波に押し流されながら生きてきたように思います。教会に入り、福音を学び、四大聖典から毎日、少しずついろいろな私自身の悩みやこの世の理解できない事柄が明らかにされていくたびに目の前がぱっと明るくなり、モルモン経が真実である証を得ることができました。

子供たちは月曜日の家庭の夕べをとても楽しみにしています。その日は好きなテレビ番組があっても消して、親子でひざをつき合わせ、特別な時間を持つことができます。私はまさに天のお父様、イエス様、そして聖霊に支えられて生まれ変わり、生かされています。もしこの世に長く生きることができたら、私の生涯を神様ののみ業のために捧げたいと願っています。一日一日神様から与えられた日を大切に、試されるたびに自分自身を訓練し、永遠の生命、幸せを得る日のために準備するよう心がけています。裕福な生活をし、心の貧しい人が多い現在、この福音こそ今の社会に必要な教えであり、私たちを幸せに導いてくれるのはこの教会のほかにはないことを信じています。(きのした・まきこ 扶助協会教師)

# 牛舎にやってきた宣教師

大阪伝道部御坊支部 木下文夫

**妻**と初めて会ったのは、地元の青年団でした。交際を続け、やがて結婚式を迎えることになりました。しかし妻の両親は私たちの結婚には反対で、式にも出席してもらえませんでした。私たち夫婦の結婚生活はそんな状態でのスタートでしたので、妻にはことさら、「幸せになってもらいたい。幸せにしなければならぬ」と強く思っていました。

結婚生活10年目が近づいたころ、妻はストレスからか体調を崩し、憂うつな日々を送っていました。病院に行っても、特に良くなる気配もありませんでした。そんな折、子供たちが行き始めた教会の無料英会話教室で宣教師に会った妻は、話を聞くようになりました。当時の妻は、どうしたらいいかわからない沈んだ状態でしたが、1990年10月から夫婦宣教師として4回目の伝道に出て働いていた西原良男長老、キクノ姉妹の話聞いて、何か生きていく足がかりを見つけたようでした。教会への出がけにいつも楽しそうに「教会へ行ってくるよ」と言う妻の顔を見ていると、なぜそんなにうれしいのか、今までのあの憂うつそうな顔はどこへ行ったのかと、不思議なほどでした。やがて晴れ晴れとした顔で、妻は教会から帰ってきます。私は「一体教会で何をしているのだろうか」といぶかしく思っていました。本当に不思議な変化でした。

私自身は無宗教でした。家の仏壇でも、正直言って手を合わせることはまずありませんでした。私にとって宗教は、人間のわがままな、苦しいときの神頼みでしかありませんでした。「きょうは大事なことがあるので、一生懸命頑張りますから助けてください」と1、2回お願いしたことがあるくらいのものでした。また教会についてはテレビで見るくらいで、アーメンと言うことと、日曜日に子供を連れて、本を売って近所を回る人々のことぐらいしか知りませんでした。ですから、妻が

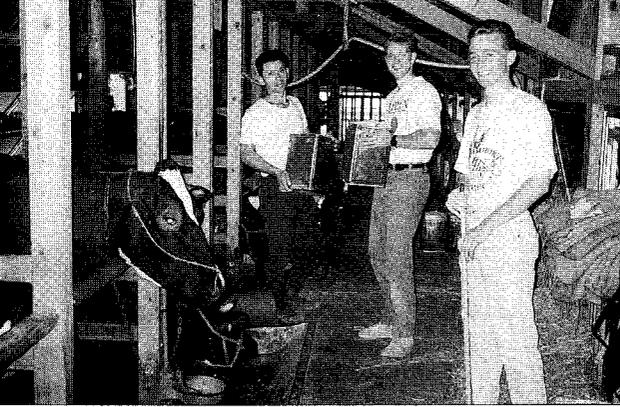
「教会に入りたい」と言った時には、夏の暑い日、子供を連れて本を売りに行くのかと思い、「あの子供連れのように、のめり込むなよ」とくぎを刺しましたが、妻は「あれとは違う。あなたの思っているような教会ではない」と言いました。

教会を知る以前、妻は毎日体調が悪いので自分の死について考え、「このままでは……」と不安に思い、離婚を考えていたようです。しかしこの教会を知ることによって、元気で明るくなってきた妻を見て、「バプテスマを受けてもいい？」と聞かれた時、私は同意しました。

西原長老夫妻は、妻がバプテスマを受ける時まで2回ほど私が働いている牛舎に来ましたが、「暑いですね。頑張っていますね」と言うだけで、教会の話は何もしませんでした。西原姉妹は、ちょうどそのころ牛舎の辺りに生えていたわらびを楽しそうに取っていました。足が悪いのに、斜面を登ったり下ったりしてわらびを取り、「たくさん取ったわよ」と子供のようにしゃいでいたのが、今でも印象深く心に残っています。

西原長老たちは、私に「教会に入りなさい」とはひと言も言いませんでした。一方妻は、教会を知ってからはとても元気になり、熱心に神様のことを学んでいるようでした。私がそばにいる時でさえも気づかないのか、わき目もふらずに勉強していました。そんなとき私はふと、妻が離れて行くような寂しさを感じました。生き生きと変わっていく妻とは対照的に、私の方は沈んでいくような、どうしようもない日々を過ごすようになっていました。家に帰るのも妻の顔を見るのも嫌で、別れようか、などとひとり悩んだことさえありました。

そんなある日、牛舎で働いていた時、妻とちょっとしたことで口論になりました。私は腹を立てて「もうええ。帰れ」とどなると、妻は家に帰ってしま



## 牛舎で牛の世話をする木下丈夫兄弟と宣教師たち

マを受けよう、と自分自身に区切りをつけた喜びと、それまでの妻に対する寂しく、悲しい気持ちの反動としてわき出た喜びが、一気にあふれ出たのでしよう。そばにいた西原姉妹から、

「すばらしいみたまですな」といわれ、「良かったなあ」と思いました。

アメリカから来た若い宣教師に初めて会った時には、彼らがとても19歳の若さとは思えず、周りにいる同年代の日本人と比べると10歳以上の開きがあるほどしっかりして見えました。彼らは毎週牛舎へ奉仕に来てくれました。最初は西原長老夫妻が来てくれたのですが、ふたりが伝道を終えた今でも宣教師は来てくれます。宣教師の持つ素直さと、何に対しても負けない、くじけない態度にはいつも感心させられます。彼らは自分で仕事を見つけて働き、一度働き出すと決して途中でやめることはしません。私の休憩の合図でやっと手を休めるほどです。これには驚きました。そのまじめで従順な態度は、私たちだけではなく、近所の人たちにもとても良い印象を与えています。

ある時、親しくしている同級生の結婚式がありました。しかし、飼育している牛がその少し前に出産する予定になっていました。牛は出産すると、5日間ほどは、朝、昼、晩と乳をしぼって子牛に与えねばならず、とても牛舎を離れることなどできません。しかし結婚式は朝から夕方までかかります。私はお祈りをしました。すると、不思議なことにお祈りの中で「牛は結婚式が終わるまで生まれぬ」という、強い確信のようなものを感じました。その確信は事実になったのです。牛は結婚式2日前になっても生まれる様子はありませんでした。私は結婚式当日も生まれぬという確信があり、式場から家に確認の電話さえしませんでした。式の後牛舎に行くと、お腹も乳もばんばんに張っていましたが、まだ産気づいてはいませんでした。その夜結婚式のためにできなかった仕事を終え、神様に「きょうは結婚式に無事出席でき、

ありがとうございました」と感謝のお祈りをしました。

その翌朝、ついにお産が始まりました。いつもは普通分べんなので無看護で生まれていましたが、ふと見ると牛は逆子で生まれようとしていました。その場合、へその緒が先に切れるので、早く引っ張り出さないと子牛の鼻と口が産道に残って窒息死する恐れがあります。でも大きな牛を引っ張り出すには、だれかに助けてもらわねばなりません。幸いなことにその日は宣教師の奉仕の日でした。ちょうどその場に居合わせた宣教師の元気な力のおかげで、牛は危機を脱し、無事に生まれました。もし私たちがいないときに牛が産まれていたら、逆子のために窒息死していたかもしれません。

私は実のところ活字が嫌いです。今までに小説1冊も読み終えたことはありません。それが教会に入ると、モルモン経、聖書、教義と聖約などの四大聖典から神権者用の個人学習ガイドまで活字の洪水です。最初は「こんなに本がいっぱいあってどうすればいいんだろう」と悩んでいました。今はゆっくりですが、少しずつ読み進めています。聖典の中でも、モロナイ書第7章45節の愛に関する言葉は、私の大好きな聖句です。

「愛は永く堪え忍び、親切であって、ねたまず誇らない、また自分の利益を求めず、容易に怒らず、悪いことを考えず、不正なことを喜ばないで真理を喜び、すべてを負い、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを忍ぶ。」

私たち家族も、愛をもって耐え忍び、西原長老が教えてくださったモルモン経の中の次のようなすばらしい言葉を実践できるように、歩いていきたいと思っています。「それであるから、あなたたちはこれからもキリストを確く信じて疑わず、完全な希望の光を抱き、神とすべての人とを愛して強く進まなければならない。それであるから、この後もたえずキリストの言葉をよく味わいながら強く進み、終りまで堪え忍ぶならば『永遠の生命を受ける』、かくの如く天の御父が言いたもうた。」(II ニーフアイ31:20)(きのした・ふみお 第一副支部長)

いました。しばらくして妻は牛舎に戻って来たかと思うと、ひと言「さっきはごめん」と言うではありませんか。結婚してからそれまでの10年間、妻がけんかをした後で謝ったことは一度もありませんでした。私はその言葉がなかなか信じられず、妻の変化には正直驚きました。

結婚してから間もなく10年目を迎えようとする時でした。私は自分も妻のようにバプテスマを受けた方がよいのでは、という気持ちに駆られるようになっていました。それまで妻に何ひとつプレゼントしたことはありませんでしたが、自分が共に神様の道を歩むようになれば、妻への何よりのプレゼントになるような気がしました。早速、バプテスマを受けるために西原長老に連絡しましたが、同じ大阪伝道部の伝道部長である息子さんが頭部の手術を受けるために、大阪へ行って留守でした。病院にいる西原長老に電話をし、「よろしければバプテスマを受けさせてください。それも、できれば明後日の妻の誕生日に受けたいのですが……」と言いました。西原長老は、「本当ですか」と驚いていました。後で知ったのですが、私が希望した日は西原里志伝道部長の手術の当日でもありました。

私はそれまで教会の話聞いたことはありませんでしたので、西原長老は急いで帰って来て、私に集中的に教えてくれました。「キリストを信じますか」という西原長老の問いに、私は「信じるように努力したいです。また信じたいです」と答えました。最後に西原長老は私に、「お祈りをしてください」と言いました。私がお祈りをしていると、涙が出て仕方がありませんでした。そのような経験は初めてでした。なぜそれほど涙が出てきたのか今でもわかりません。おそらくバプテ

# 「若人はすべて伝道に出るべきである」

岡山伝道部専任宣教師 南 吏花

**現** 在私は、岡山伝道部の宣教師として奉仕しています。バプテスマを受けたのは、6年前の5月でした。今でも学校の帰りに毎日、姉妹宣教師から福音を教えてもらったことを覚えています。

子供のころ私はいつも、押し入れにリュックサックを入れてその中に服やお菓子やお金を入れておかないと眠ることができませんでした。また枕元にはいつも、ナイフや棒を置いておかなければ安心して眠ることができませんでした。いつもひとりになることが怖くてたまりませんでした。「もしもひとりになったら私はだれに育てられるのだろう。」心の中で私はいつもそのことを考えていました。「世界中で一番やさしい人はだれだろう。」それも本当に私が会いたかったのは、見せかけではなく、心からのやさしさを備えた人でした。もしそういう人がいたら、私はそこへ行こうと思いました。

テレビで見たのか本で読んだのか忘れてしまいましたが、初めてイエス・キリストというお方について知ったのは、小学校のころだったと思います。それまでに感じたことがないくらい感動しました。初めて心に平安がありました。その時、いつか必ず教会に行こうと思いました。イエス・キリストを信じている人のところへ私も必ず行こうと決めました。

年月が過ぎていく中でその望みはいつも持ってはいましたが、中学校に入学したころから、だんだんと悪いことを楽しみとするようになっていきました。人を傷つけることや、また、自分を傷つけることばかりしました。そして「いつ、どうやって死のうか」と、毎日そればかりを考えていました。

中学校を卒業するころ、以前に持っていたカードが何かの拍子に出てきました。そこには「イエスさま、へりくだって祈ることをお許してください」と

書かれていました。そのカードを見た時に、私は子供のころに決めたことをすべて思い出しました。「私が教会に行くのは今だ。」こう思った私はその夜、外に出て心から祈りました。「イエス様の教会へ行けますように」と。

数日後、専修学校の入学式がありました。その日クラスに分かれて私の後ろの席に座った女の子が、末日聖徒イエス・キリスト教会の会員であることを知りました。彼女が教会へ行っていることを聞いて、私は体が震えるほどうれしかったことをよく覚えています。

恵まれて若い女性の年代で教会員になった私にとって、セミナーや若い女性の活動で学んだ教会の標準は、いつも守りとなりました。それまでとはまったく違う生活を始め、つまりいたことも何度かありましたが、イエス・キリストの教えを毎日読めることは、大きな喜びでした。また、教会員の家族を見るたびに、永遠に家族が共にいられるという祝福に、とても強い希望を持ちました。

教会員として生活していくうちに、私には何人かの心から信頼できる友達ができました。そのひとりが湯沢<sup>湯沢</sup>淳子姉妹です。損得などまったく勘定に入れない、純粹で天使のような湯沢姉妹の働きはいつも愛に満ちていました。老人ホームで毎日忙しく働く彼女には、休みはわずかしかなかった。けれども彼女は休みの日がくるたびに、たくさんのパンやお菓子を買って、教会に来れないでいる姉妹の所へ自転車に乗って行くのでした。だれからも愛される彼女のアパートには、いつも大勢の

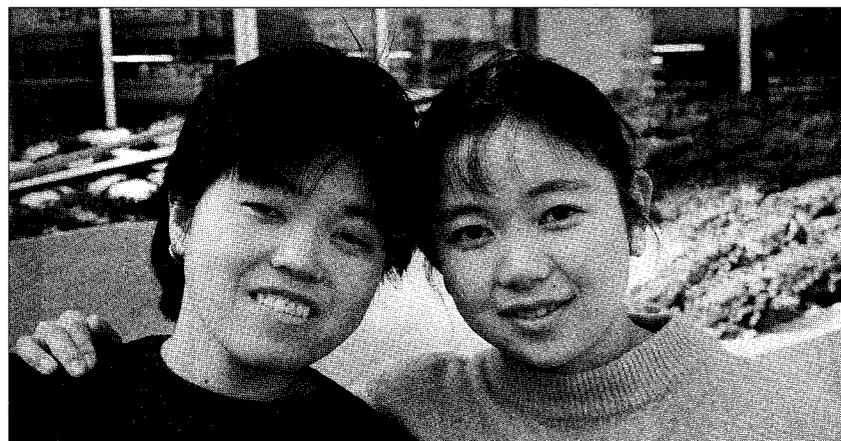
兄弟姉妹が遊びに来ていました。私自身、彼女の愛にどれだけ助けられたかわかりません。その彼女が伝道に出る決意をして岡山伝道部の召されたのは、1990年7月のことでした。当時ステーク宣教師の同僚であり、また親友でもあった私達は夜空を見ながら、「また、必ず一緒に伝道しようね」と約束して別れました。

そのころ私は専任宣教師として伝道へ出ることを迷っていました。伝道に出るのは、考えただけでも身震いするほど嫌でした。ステーク宣教師として働いてはいましたが、本来は人と話をするのが大の苦手で、おっくうでした。また、そのころ結婚したいと思う男性がいました。私の長い間の望みは永遠の家族を持つことでした。毎日毎日、伝道と結婚について考え、祈り、悩みました。

「若人はすべて伝道に出るべきである。」(『全世界に出て行って』「聖徒の道」1974年11月号, p. 483) キンボール大管長の語ったこの言葉から、自分は決して逃げるべきではないと感じました。「伝道に出るべきである。」どう考えてもそう思いました。

それでも私には決めることができませんでした。どうしても結婚したかったからです。怖くて伝道について祈ることができませんでした。毎日の仕事も忙しく、残業も続く中で、いつも悩んでいるうちにいつか本当に心身共に疲れてしまい、主の標準に従うことがとてもむずかしく思えるようになりました。「伝道に出ることも決められない。結婚することも決められない。だったら全部やめてしまおう。」とうとう私は、教会に行くのもその男性に会うのも、どちらもやめることを選びました。

何カ月か過ぎ、伝道へ出ているふた



南吏花姉妹(右)と同僚の湯沢淳子姉妹

## 役員の任命

1992年11月11日から12月7日までに管理本部会員統計記録課に通知のあった役員の異動(敬称略)

- 東京南ステーク部  
新ステーク部長：尾形守  
(前任者：Gordon A. Nebeker)
- 京都北ステーク部  
新ステーク部長：赤松康充やすみつ  
(前任者：福山克一郎)
- 仙台伝道部青森地方部弘前支部  
新支部長：吉田満  
(前任者：佐藤昭治)
- 仙台伝道部盛岡地方部一関支部  
新支部長：佐々木啓一  
(前任者：古川盛悦)
- 仙台ステーク部山形ワード部  
新監督：山田正  
(前任者：伊藤悟)

りの友達から手紙が届きました。ひとりの手紙は23枚にもわたる長いもので、その中にはあふれるほどの愛のこもった言葉が書かれていました。そしてもうひとつは湯沢姉妹から速達で届いた手紙でした。「私はあなたのことを何も心配していません。」

そのふたりの手紙を読んでいて、困難ではあっても祈らなければと思いました。心から、必死の思いで祈りました。伝道についても祈りました。体中にみたまを感じて、悲しくもないのに涙があふれて止まりませんでした。伝道に出ることを決意した私は教会へ戻り、兄弟姉妹の助けを受けて伝道の準備を進めました。

伝道の召しが届いて私の任地が岡山伝道部とわかった時、私は湯沢姉妹と同僚になれると確信しました。そして数カ月後の1991年10月から1992年1月まで、私と湯沢姉妹はもう1度主の恵みによって、今度は専任宣教師の同僚として働くことができました。精一杯、力を尽くして働き、喜びにあふれた生活でした。多くの苦しみや悲しみを乗り越えて、主の深い愛を感じた時期でもありました。

長い間私は、伝道は私から主への贈り物だと思っていました。けれども実際は、主が私にくださった祝福であり、恵みでした。専任宣教師として働いて初めて「若人はすべて伝道に出るべきである」と言われた理由がわかり、神とイエス・キリストの計り知れない愛に感謝しています。

専任宣教師として働くには、多大な体力と精神力とを必要とします。自分のわずかな働きでさえもこれほどの力があるのなら、主が私たちを贖うために払ってくださった犠牲はどれほど大きかったのだらうと考えるとき、モーサヤ書第3章7節が心にしみるのです。「このお方は誘惑を受け、肉体上の苦痛と飢えと渇きと疲労とを経験したもうが、これは死ななければ人間に堪え難いほどひどいものである。なぜならば、見よ、このお方は全身の毛孔から血を流したもうほどに、その民の罪悪と憎むべき行いのために苦痛を感じたもうからである。」(みなみ・りが 仙台ステーク部長町ワード部出身)

- 高崎ステーク部前橋ワード部  
新監督：桑原健次  
(前任者：中西文夫)
- 東京北伝道部長野地方部諏訪支部  
新支部長：佐藤貞市  
(前任者：松島清)
- 福岡ステーク部二日市支部  
新支部長：藤木英二  
(前任者：菅原英展)

## 新ユニット

- 大阪堺ステーク部橋本支部  
支部長：片山博  
(1992年11月22日、河内長野ワード部、飛鳥支部より分割)

## 名称変更

- 大阪堺ステーク部河内長野ワード部  
監督：京谷隆  
(河内長野支部より名称変更)
- 大阪堺ステーク部和歌山支部  
支部長：藪谷彰やぶたに  
(和歌山ワード部より名称変更)

## 皆さんの原稿を募集しています

- ▶ ローカルページでは以下のような原稿を募集しています。また、以下のような証のある方のご紹介も歓迎します。
- ① どのようないきさつで改宗したか。
  - ② 日々の生活に福音の原則をどのように応用しているか。またそれによってどのような祝福があったか。
  - ③ 教会員として職場でどのような努力をしているか。また、信仰をどのように生かしているか。
  - ④ 友人や周囲の人にどのように福音を伝えているか。
  - ⑤ お休み会員にどのように手を差し伸べているか。
  - ⑥ 一度お休みした人がどのようないきさつで教会に戻って来たか。
  - ⑦ 伝道に出るに当たりどのように準備

し、障害を克服したか。また、専任宣教師になって得た証。

⑧ 神殿参入や家族の記録を作成するに当たってどのような助けや祝福があったか。

⑨ その他。(家族の証、ワード部/支部特集など)

▶ 現在ローカルページでは証の著者の生年を記載しておりませんが、編集作業の参考のため、投稿の際には連絡先(住所、電話番号)、教会での責任(役職名)、所属ユニット名と併せて生年を記入し、写真を同封のうえお送りください。

▶ お送りいただいた原稿は一部手直しさせていただくことがあります。また、掲載されるまでには若干時間がかかる場合もありますのであらかじめご了承ください。

▶ あて先：☎150 東京都渋谷区桜丘町28-8 末日聖徒イエス・キリスト教会「聖徒の道」編集室  
電話03(5489)9251  
ファクシミリ03(5489)9254



高崎ステーキ部<sup>くまがや</sup>熊谷ワード部  
(1992年3月11日完成)

# 新教会堂 の紹介

鉄骨造2階建

建築面積：188.17㎡

延床面積：358.38㎡

敷地面積：661.16㎡

所在地：埼玉県熊谷市石原914-6

☎0485-22-2020

木造平家建

建築面積：145.53㎡

延床面積：144.79㎡

敷地面積：755.28㎡

所在地：鹿児島県名瀬市長浜町4-7

☎0997-52-2725

木造平家建

建築面積：301.85㎡

延床面積：283.60㎡

敷地面積：1,036.45㎡

所在地：北海道北見市常盤町3-16-35

☎0157-61-4830



鹿児島地方部<sup>なせ</sup>名瀬支部(1992年6月5日完成)



釧路地方部北見支部(1992年6月24日完成)



東京東ステーキ部<sup>ちようせい</sup>長生ワード部  
(1992年8月10日完成)

鉄骨造2階建

延床面積：358.38㎡

所在地：千葉県長生郡長生村本郷1-120

☎0475-32-4402

建築面積：188.17㎡

敷地面積：661.16㎡

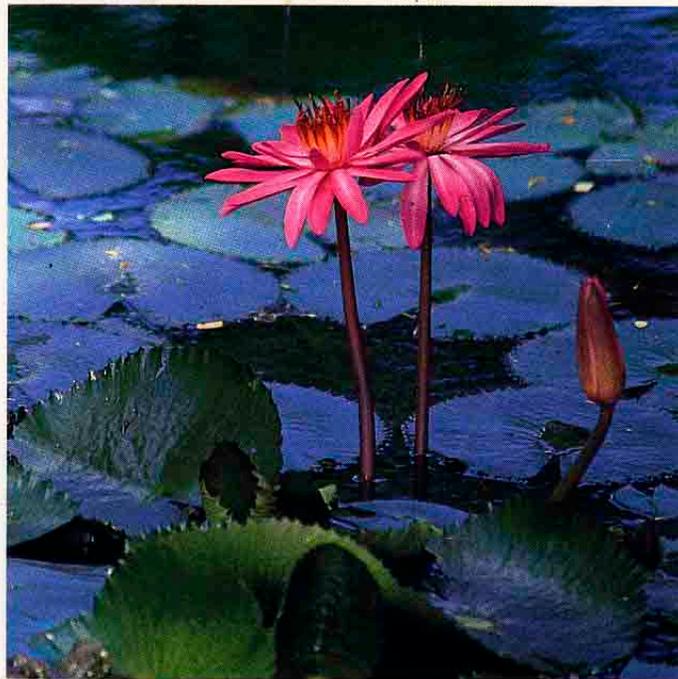


### 「ノーヴー神殿の建設」ガリー・E・スミス画

神殿の建築技師ウィリアム・ウィークスと打ち合わせるジョセフ・スミスとブリガム・ヤング。

ジョセフ・スミスの殉教後も、聖徒たちは町から追放される恐れがあるにもかかわらず、ノーヴー市の建設に励んだ。

資金も資材もない状況の中で、ブリガム・ヤングは日記にこう記した。「聖徒たちがここにとどまって、……神殿を完成させるべきかどうかを主に尋ねた。とどまるべきであるというのが、その答えであった。」ノーヴー神殿は1846年に献堂された。



**太**平洋に浮かぶ「天国」のような島国フィジーに咲くこのスイレンは、島を彩るかれんな花々のひとつ。福音はこのパラダイスで生活する会員たちに、さらに霊的な美しさを添えている。(本誌「フィジー——信仰の島々」p. 32参照)